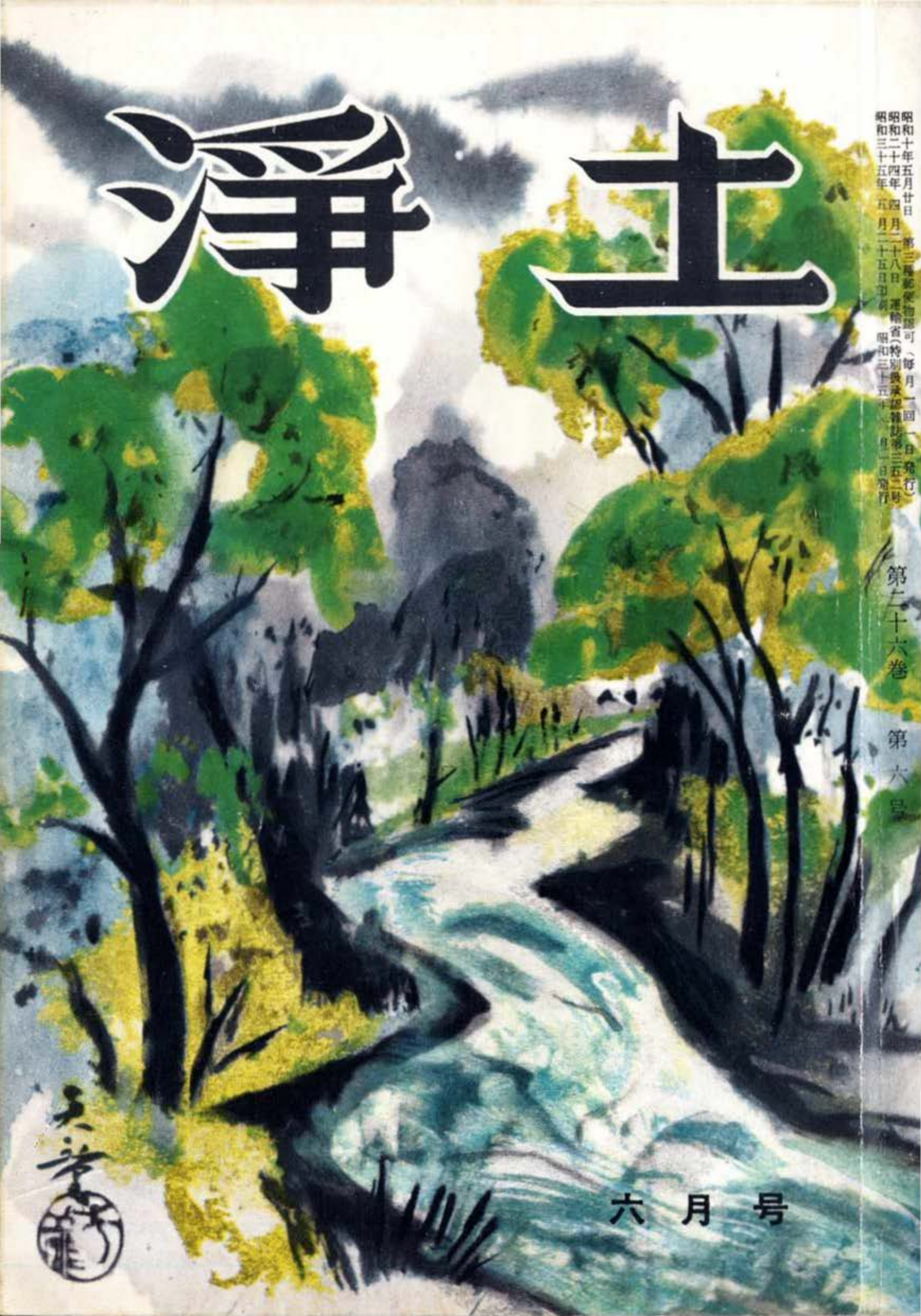
淨土



昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和三十五年五月二十五日印刷 昭和三十五年六月一日発行

第二十六巻 第六号

六月号

☆☆信仰の歩みを進めるために☆☆

既刊

浄土トラクト

大正大学教授　竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二〇円〒八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるこころ
4. 美わしき世界の建設

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円〒八円

惻々と人の心を打つ失明の体験　森　赫子
文学の世界からみた無常の話　武田　泰淳
宗教の信仰の遺文にみる　佐藤　賢順

二十部以上　五分引
五十部以上　一割引
百部以上　一・五割引
二百部以上　二割引

東京都品川区上大崎一の七八二
法然上人鑽仰会
振替　東京八二一一八七番

浄土　六月号　目次

表紙・扉絵　結城天童
さし絵・カット　加藤金一

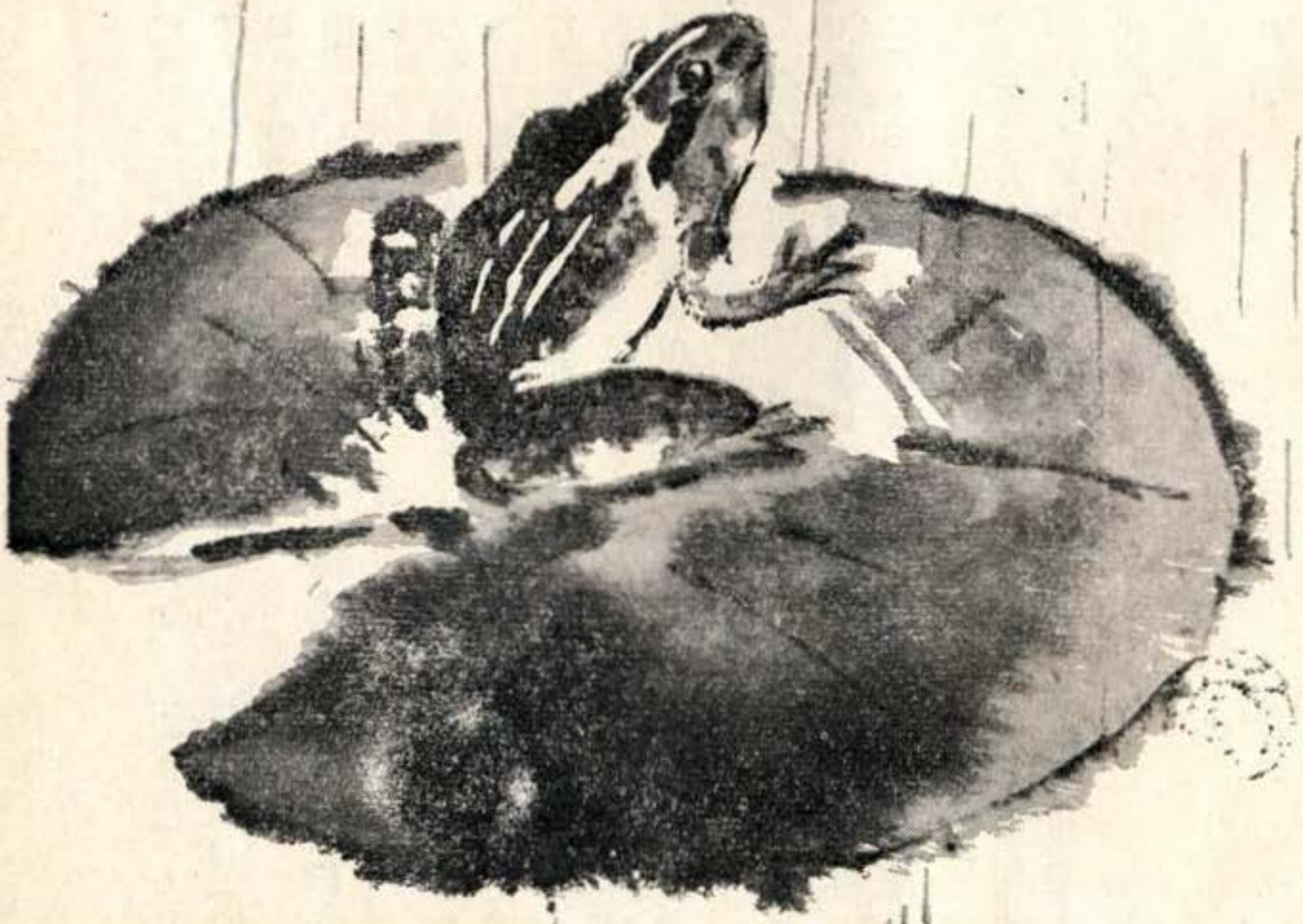
法然上人七百五十御忌記念
「講演と映画のつどい」紙上録音特集
挨拶……小林大厳…（3）
法然上人のお言葉……佐藤密雄…（6）
三余の業……太田康雄…（14）
身辺雑記⑥
他人のこころ……森赫子…（16）
高僧伝笹本戒浄伝……大橋俊雄…（10）
法然上人の感化……村上博了…（12）
新篇百喩経⑥……伊東挙位…（23）
信仰相談……（32）
石川啄木（5）……須藤隆仙…（18）
創作　世尊と阿闍世—第一回—……鶴田湛泉…（24）
扉の御法語……（16）
童心仏心……（31）
自然……（22）
会員だより……（40）
仏教習俗覚書（3）……中村康隆…（34）
鞍馬の竹切り（竜蛇信仰と仏教）

浄土

六月号

外に賢善精進の相を現じて、内には虚仮をいだくものは、日夜十二時につとめおこなふ事、かうべの火をはらうがごとくにするとも、往生をえずと也。ただ内外明闇をえらばず、真実をもちゆるゆへに至誠心となづく。

法然上人御法語



浄土宗教学院主催

講演と映画のつどい

―紙上特集―

原爆の危機におびえる現代を救うものは何か。無論軍備でもない。政治でもない。経済でもない。ズバリいうならば、それは「信仰」以外の何ものでもない。

原爆の爆風にも吹き消されぬもの――それは人の心の中にともされる「信仰の火」のみである。

現代はも早や個々人の小さい「安逸」に耽溺することは許るされない。人類は共通の悩みとおそれに浸され、日々を不安のうちにすごさねばならなくなった。「信仰」もまたそのように、凡ゆる人々の胸に、同じあかるさをもって点ぜられねばならない。この「不滅の火」によってこそ、世界中の人々の心は一つになり、世界的危機をのり越えて行く力となることができるのである。

凡ゆる人の胸に「信仰の火」を点ずるもの。これこそ浄土宗の祖、法然上人であり、上人の声高く言いいで給うた「信仰」のおしえこそ、すべての人の心を一つにつなぎ、現代の危機と不安とに対する不壊の防波堤となるのである。

ここに、去る四月十六日銀座山葉ホールに於て浄土宗教学院主催のもと行われた「講演と映画のつどい」の紙上録音を企て発表することに致しました。

（挨拶　小林大厳宗務総長）

挨拶

小林大厳

（浄土宗宗務総長
浄土宗教学院長）

私たちは、法然上人の言行、すなわち仰言ったこと、行ないなされたことが、私たちの日常の暮しの上のよきしおりとなることを信じて、今日までまいって居ります。しかし、おはづかしいことには、信じていますことは人後ではありませんが、その信ずる通りに生活の上に具現できかねていますことと、相互に、足らざるを補い、進まざるをはげまし合っていく同志の力が弱いため、皆様方のまえに、本当に法然上人の言行を日々の生活の上に実現しています、と云いきれないことであります。しかし、各位の御指導と御鞭撻を仰いで、お互に志を同じくするものが、その理想に向って、互にはげまし、互に切瑳し合って、法然上

人の言行をくらしのよきしおりとして、その理想具現のために、一歩でも邁進したいと念願しています。

この念願をよりよく達成し、一人でも多くの人が法然上人の言行を日常生活のしおりとするために、夫々の地域には立派なお寺があります。それにも拘らず、あえて銀座の真中に出てまいりましたゆえんは、私たちの所信を披瀝して、法然上人の言行にしたがうところの同志の一人でもおおくえて、よき同行をもとめて、本日、このつどいをもった次第であります。

○

法然上人のお生れになられたのは、申すまでもなく、西暦一一三三年であります。そして、天下に御自身の思想、仏教信仰の体得そのままを、ひろくお示し下さったのは一一七五年であります。数え年、四十三才であられました。よく世間では、男の四十二、三は厄年とか申しますが、まさに厄年の法然上人は、阿弥陀仏の信仰を獲得されまして、御自身の厄くを払しょくされると共に、天下大衆ともどもの厄払いをなさろうとされたのが、浄土開宗であろうと考えられます。

一般に、マルチン・ルーテルの宗教改革が論じられ、高等学校の世界史などをひもどいてみても、宗教改革はルーテルに焦点がしぼられて居ります。日本史のどこを開いても、宗教改革というような表現の文字は見当りません。ゆらい、日本には、おかしなくせがあって、一度外国へでも行ってこないと、故郷では値打ちがあがらないようである。外国へ行って、恥をかいて汗みどろになって帰って来ても、日本では洋行して来たということでハクがつく。学問上においても、天下無双の研究をなさって居られる方でも、日本では学界これを認めない。認めても知らぬ顔をしているというような弊風がないではない。ところが、ひとたび外国へ行ってくると、ハクライになって値打ちがあがったような恰好になるわけであります。近頃、アメリカあたりでブロードウエイやラディオスチンの辺を散歩してみると、日本の網代笠のできそこないのようなものを真黒にぬりつぶし、そこに造花をちょっとつけてある。日本でいうと、あられかなにか、夏ビールのお肴かつまみの入れものみたいな感じをうけますが、それが、なんとボンネットという、当今最新流行の型だというわけです。

また、日本はおもしろい国で、戦争後頭のきりかえをするように、封建思想じゃいかんとよく言われますが、いちばん頭を切りかえる封建思想の象徴の表本となるものは鉢

巻だろうと思う。この鉢巻がこの頃大流行で、友達の霊をなぐさめるのに、わざわざ鉢巻をして焼香をする。これは、この国のかたき打ちに出るところの武士の末孫かと思ったら、これが先祖代々平民の子であるという。まことに、あれ程頭にまくところの鉢巻というものは、封建の代表的な一つだと考えていましたが、最近では、当今文化の先端を切ろうとするものは鉢巻をしなければならんというような国柄であります。

○

あれこれ考えまして、もし、法然上人の時代に、言葉の上の邪魔と交通の不便がなかったならば、おそらくわが国における、法然上人の宗教活動というものは、ルーテルのウインテンベルヒ大学の門前に掲げられました、九十五条の旧教に対する新教の宣言より以上に、世界中を震動させたことであろうと考えるのであります。

ところが、あちらはえらい、こちらはジャパンでいかんという、いずれのときからか培われてきた日本ですので、この法然上人が灯台もと暗しと申しますか、忘れてしまわれて、宗教改革といえば、一五七七年のマルチン・ルーテルの宣言をいうようになりました。しかし、法然上人の浄土開宗が一一七五年としますと、ルーテルより三百四十三年程早く、法然上人のなげられた宗教改革が、日本の小さな島国で光を放ち、音を発したわけでありますが、交通の不便や、言葉の障碍があって、今まで世界の注目を失ったということは、まことに残念なことであります。

○

しかし、光は光をはなち、つつみはほどかれて、まさに法然上人獅子吼の状態は、東西に自然にあらわれてきているようであります。とくに、明年は法然上人が亡くなられまして七百五十年であります。これを機会に、法然上人のおしえを、私たちの生活のしおりとし指導をいたします同志を求めて、御挨拶に出ました。いく久さしき御健康を念じますと共に、強健なお体の上に、精進不倒の生活を充実していただくところの精神をもって、日夜の生活の上に私たちの師と仰ぎます法然上人の言行八十年のことを味っていただき、よき友としていただきますならば、仕合せの中の仕合せ、尊き中の有難さだと思います。

× × ×

（講　演　　佐藤密雄博士）

法然上人のお言葉

佐藤密雄
（大正大学教授文学博士
浄土宗教学院研究所長）

私は、法然上人のつどいでありますので、法然上人のお言葉を二、三お伝えして御挨拶にかえたいと思います。

明年は法然上人が亡くなられて、ちょうど七百五十年になります。法然上人は、源頼朝から十四才年上の方であり、平清盛より十六才年下の方であります。亡くなられたのは、この方々よりあとでした。頼朝は五十三才、清盛は六十四才で亡くなられましたが、法然上人は長寿を保たれて、源実朝の時代に八十才で亡くなって居られます。そして、亡くなられてから、明年度が七百五十年に当るわけです。

法然上人のお言葉に

「あるひは、金谷の花をもてあそび、遅々たる春の日をむなしく暮し、あるひは、南楼に月をあざけりて、漫々たる秋の夜をいたずらにあかす　云々」

という一文があります。

これは、春は花をもてあそびながら、春の日ながをむなしく暮らし、あるいは、秋は月を眺めながら、秋の夜ながをいたずらに過していた、おそらくは、七百年前の法然上人の時代の貴族たちの生活を御批判になられたものだろうと考えます。当時の貴族たちは、もはや実権は武士たちに移ろうとして、おのれの思うままにならない。その思うようにならぬ世界にあって、何んらの努力もなく、ただ花をながめたり、月を楽しんだりすることに逃避して、漫然と暮していたようであります。それを、上人が指摘されて居られるのでありますが、その当時、そういう人ばっかりあったわけではありません。

このようにも申されて居ります。

「あるひは、厳寒に氷をしのぎて世路をわたり、あるひは炎天に汗をめぐりて利養をもとめ、かくの如くにして昼夜朝暮やむことなし」

これは、冬の寒いのに氷を踏んで商売にはげみ、あるいは、炎天下の暑いさなか、汗と塵にまみれながら仕事に励んでいる人々があることを述べられているのであります。

一方には、先程申しましたように、貴族の人たちは漫然と日を過し、また、他方においては、ただおのれの身を養わんがために、氷をふみ、汗をしぼって、昼夜朝暮をいとわず生活している。これは、何を仰せになったかというと、私どもは漫然として世の中を送っていることがおおい。お金のないものはお金を貯めようとし、何のために生きるか、ということを考えずに生きている。

ちょうど、それに適当した言葉で、現在私どもが用いている言葉に「そこに山があるから…」ということがあります。これは、昨年あたりから流行した言葉でありますが、それは、ネパールの世界で一番高い山へ登った有名な登山家に、ある人がたずねて「あなたは、何故、あの山へお登になりましたか」と云ったときに、「それは、そこに山があるから」と答えたというのです。そして、この言葉は、若い人たちの間に流行して居ります。たとえば、青年から恋をうちあけられた女の人が、それでは、「あなたは、私にどうして恋をなさったんですか」と聞くと、「私の前にあなたがおいでになったから」というようなことなのです。これは、まことにおもしろい言葉であります。この言葉が

象徴するようなことが、今日の私たちの生活の一面にないとは言えません。テレビをみながら、そのテレビに出てくる画面にひきずられて漫然とみている。今日は誰々の出演するドラマがあるから、少し自分の頭をやすめる為にみよう、というのではなくして、テレビの前に漫然と坐っている。そこに場面があらわれるとそれに引きづられながら時を過すというような生活も多いのではないかと思います。

法然上人は私どもに、南無阿弥陀仏という念仏を唱えよと仰言いました。それはどういうことでしょうか。南無阿弥陀仏と唱えると、我々が死ぬと共に、阿弥陀仏の極楽浄土に生まれるというのが、この南無阿弥陀仏です。しかしながら、それでは死ぬためかと言いますと、それは死ぬためではなくて、我々が南無阿弥陀仏を唱えることによって、我々に死のあること、我々の生涯に期限のあることを知ることができるのです。猫や犬は生れ出でて、そこに食物があるから、それを食べる。そこにこわそうなものがあるからそこを逃げる、というような生活をしています。しかしながら、我々人間が他の動物と異なっているのは、何かの目的をもって生きていることでありましょう。この世に生をうけた生涯は刻一刻ちぢまりつつあるのです。その生涯を何とか有意義に、何かをなさねばならないし、その何かをなさねばならない期限は短かくなりつつあるのです。人おのおのの事業を成しとげようとか、自分の子供が育つまでは自分が働かねばならぬとか、というように、おのおの自分の生きる限界をしっているから、三十年にできる仕事、五十年にできる仕事を休みなくなそうとするのでありましょう。我々が南無阿弥陀仏と唱えるということは、そのことについて常に反省をおもいおこすことになるのです。南無阿弥陀仏と唱えることによって、おのれは唯漫然として生きているのではなかろうか、今日をしっかりと意義ある一日として生きねばならない、というように反省をすることになるのです。

さらに、法然上人のお言葉につぎのようなものがあります。

「それ朝にひらくる栄華は、夕べの風に散りやすく、夕べにむすぶ冥路はあしたの日に消えやすし、これを知らずして常に栄えんことをおもふ。しかるあひだ無常の風ひとたび吹きて有為の露ながく消えぬれば、これを広野にすててこれを遠き山におくる。かばねはつひに苔の下にうずもれ、たましひはひとり旅の空にさまよふ。」

最後の方の、自分たちが死んだならば、肉体は苔の下に埋れて、魂だけが旅の空をさまよう。そのような旅の空に

さびしくさまようことなからんがために、南無阿弥陀仏と唱えるのであります。しかし、南無阿弥陀仏と唱えることによって、私どもは常に死をおもい、そして、おのれの命の短いことを考えねばならないのであります。あしたにひらくる栄華というのは、たとえば朝顔の花は、夕べまでもたずしてしぼんでいくし、朝露は陽があたるとともに消えていく、このように我々は、必ずや死ぬ身であり、我々の死というものは、我々にはいつ来るかわからないのです。

しかしながら、死は必ず来るのであり、そして、いつ来るとも分からないのだということを、法然上人はそのお言葉のなかで、私たちにお示し下さったのではないかと思います。

私どもが南無阿弥陀仏と唱えるということは、先程申しましたように、死とともに仏の浄土に生まれるという、安じようとして死するための用意にお念仏を唱えているのです。だが、そのことは現在の日々を充実して暮さねばならないために唱えるのです。何故でしょうか。それは、いつ来るともしれない死に我々は対処してお念仏をしておるのです。そうすれば、今日一日、あるいは明日ないかもしれないこの一日を、我々は何としても、充実して暮さねばならない。今日を無駄にしてはならない。そのためには、我々はお念仏をし、そのおもいを新らたにせねばなりません。

そのような意味で、お念仏を申さねばならないということを、この法然上人のお言葉が私どもに示しあたえられているのだろうと思います。

他人様のことは申しあげられませんが、私自身もうかうかして、今年かぞえて六十才、それはまだ私が三十一、二才の頃は、ひとつ勉強して世間的に価値のある学績をあげ、あるいは恩賜賞でも獲得してやろうというような意気込みもありましたが、そのうちと思っている間に三十年うかつに過してしまいました。すべてのものが、私のようになるとは申しません。世の中には立派な行績をあげて居られる方々は多いのでありますがしかし、えてして私のようになり易い。そのように、私のような心弱いものに法然上人は、かかるお言葉をくださったのだろうと思います。

私も、この頃、毎日そのつもりで南無阿弥陀仏を唱えるならば、このような失敗はなかったのだろうと思われてならないのです。

ついぞこの失敗をいたしましたので、自分の恥とともにこの言葉をささげて、法然上人を偲んでいただきたいと存じます。

近代高僧伝

笹本戒浄伝

幕藩体制がくずれ、明治の御代がおとづれると、御一新の波はちまたにあふれ、「文明開化」を合言葉に、次々に新時代にふさわしい改革が日進月歩の勢いで行われていった。何でも新らしいものが文明開化と言われた。そのような世相のめまぐるしい変転のさなか、明治七年一月浅草黒船町に河田米次郎の三男として生れたのが金次郎、後の戒浄であった。彼は八歳の時寺にもらわれ、十一歳にして樹下信戒について剃髪し得度した。名を戒浄と改めたのは明治二十一年であったが、この名は師僧信戒の前の名であったということである。これより先き、四歳の頃のこと、鏡台に向って髪をすいていた母の背中にもたれかかって、「お母さん、死んだら一体どうなるの」と問われたこともあり、母はさもうるさいというような様子で、「死んだら地獄に行くのさ」と言われた。時に地獄のほかに極楽浄土のあることも知らず、ただ子供心に死んでも地獄という所があって、其処に行けるのかと思って安心したこともあったという。後世欣求の心はその頃からもたげていた。仏門に入ってからの彼は念仏に一縷の望みをかけ、信仰の増長につとめたけれども、長ずるに及んで浄土宗学本校に入り、大乗非仏説を聞き、おのれが信仰の唯一のよりどころとした三部経が釈尊の所説でないことを耳にし、パッタリ念仏をとなえることさえ出来なくなり、悶々のうちに日を送らざるを得なかった。果して三部経は釈尊の説かれたものではないのだろうか。阿弥陀如来も、極楽浄土も実在しないのだろうか。浄土宗に学び、心の唯一のよりどころは阿弥陀仏であり、浄土三部経であった。阿弥陀仏の実在が信じられたればこそ念仏が申されたのであるが、三部経が仏説でないと聞いた時、弥陀の存在も否定せざるを得なくなり、従って念仏も申されなくなってしまった。心のきづなは切られてしまったのである。

このような煩悶の日を過している中にも、幼なき日母からあたえられた因縁によるものであろうか、本堂で念仏申されなくなっても、毎朝観音堂にこもって「南無観世音菩薩」と其のみ名をとなえることだけは出来た。そして「どうぞお観音さま、真実の如来さまがましますものならば、お教え頂き度うございます」と一心に護念を仰ぐこと十一年、遂に真我の一面に気付き、この真我こそ阿弥陀仏の法身であり、これぞ永遠不滅、無

量寿の大我であることを知り、この如来の法身を当面の理想とする禅宗によろうと思い、禅宗流の念仏をはじめられたのであったが、それにしても信仰を得、念仏申すことの機縁が熟し得たのには法兄宮本契善と、仏陀禅那辨栄聖者の存在したことも忘れてはならない。両人は共に良く念仏申され、契善は一度息を引きとって後ち数十分にして蘇生し、以来三十三年もの長い間娑婆に身をやつし、熱烈に念仏策励した妙好人で、戒浄が一度は還俗を志したにも拘らず、その心をひるがえし念仏に導いた恩人、辨栄は光明主義をとなへた信仰家であった。これより前、彼は浄土宗本校から金沢四高を経、東京帝国大学で心理学を専攻し、心理学の実験によって「唯識」の深理を体証されたのであるが、念仏三昧の如何にすぐれたものであったかは契善によって心眼を開かれたのである。契善の没後、山口鯛三郎宅で辨栄に遇い、三拝して懺悔の文をとなえ、無始以来の罪を懺悔し「私は如来さまの法身を理想としております」と申せば、聖者いわく「いいえ、私共の理想は如来さまの報身であります。それ故報身を本尊と仰がなくてはなりません」と懇ろに教示され以来聖者に深く傾投すると共に、禅宗流の念仏を捨てて聖者から下附された三昧仏を掲げて念仏することになった。時に大正二年、宗教大学教授として講壇に立っていた頃である。同九年十二月聖者遷化の後は、在世中自分の衣鉢をつぐ者は戒浄であるとして、度々「自分の亡き後、わからぬ事あらば何でも笹本に聞け」と仰せられた因縁もあり、光明会の二世をつぎ、昭和十年二月全国光明会の統制なるや、推されて総監となった。

或時若い僧が偶々九州福岡に別時念仏会をつとめている彼に問うたことがある。「お上人様、私の寺の本尊さまは何でも奈良時代か、何か大変古い作だということですが、随分破損していますので修繕の必要がございますが、そういう古い御仏像を修繕するのも如何かと存じ其儘にしていますが」と。時に間髪も入れず、「それは御修繕するのが結構ですよ、御本尊様は芸術品や骨董品ではありません、私共の大切な信仰の対象なのですから」と仰せられたという。若僧にして見れば後世手を加えれば古文化財的価値からすれば半減してしまうというような考えから、この質問がなされたのであったが、彼はあくまで本尊は「大切な信仰の対象」とうけとめ、「修繕なさるのが結構である」と彼の信念を吐露されたのであった。そのような態度なればこそ、彼の住寺慶運寺の墓地には石像はいくつもあったが、他で見うけられるような欠損したものは何一つとしてなかった。「片輪な仏像をまつってはいけない」という精神から、一寸でも欠けているとすぐ修理なされたからである。

かくて日夜、弥陀の慈光裡に全国を留錫し法光の宣布につとめたが、偶々昭和十二年七月廿一日より五日間、京都古知谷阿弥陀寺での念仏三昧会に侍り、懇ろに指導なされ、終て翌廿六日自坊慶運寺に御機嫌よく帰られたのも束の間、夜九時四十五分には早や忽然として「大ミオヤ」（弥陀）のもとに帰られたのであった。時に春秋六十四歳、法名を「清蓮社信誉上人善阿随願戒浄大和尚」という。

（大橋　俊雄）

兼実公の信仰 (3)

頭光の橋

村上博了

一

若葉の候、いろいろの緑りは美しいものである。山野あげて緑一色、みどりほど人生をいつもほっとさせるものはない、あきることがない。

月輪山荘の南方稲荷山には山藤の花も咲き、わらびとり、松露とりの姿も絶えない。耳をすませば渓川のせせらぎも聞え、小鳥の音いろもなんとなく楽しいものである。

元久二年四月五日、兼実公は五十五才であった。四月八日灌仏会、只今の花まつりを二日後にして、いつもの念仏を申し、上人の説法をたのしまれたのである。

前年十一月十三日の公の文書には、

頃年よりこのかた、病せまりて命あやうし。帰泉ちかきにあり。

と記されている。

健康が昔のようでなかったらしい。十一月七日上人の七ケ条起請文、山徒の横暴などで、心身共におつかれであった、正月には元気になられた。三月十九日には、行願寺一切経供養、二十六日には源通具藤原有家定家らが、新古今和歌集を奏進のことがあって、公はいよいよ明るく元気を加えられた。

五日、公は上人を月輪殿に迎え、数尅の間に互り法談を聴かれたのである、公は殊に感銘された。

上人が、おいとまを告げて退出せられる時には、公は先きに庭さきにいられた。その時、公は地上におすわりになられ、上人を仏さま同ように礼拝、ひたいを地につけて、やや久しうされてから、起きられて涙ながらに、

上人が橋をお渡りになられる時、上人は地をはなれて　虚空に蓮花をふみ、うしろに頭光を現じ玉う、見ずや

と、仰せられた。

おそば近くに居た右京権大夫入道(戒心)と中納言阿闍梨尋玄（本蓮房）は、

はい、私共には見えませんでした

と答えている。

御伝には、中央にぎぼし附の丸味のある橋があり、御殿から退出の上は足に蓮花をふみ、頭光が見える。玄関先きに禅閤が地上に座って拝んでいる、その先、はしのたもとにお伴が礼拝している。はしの下中央右よりに松あり藤の花が、今をさかりと咲いている、はしのたもと右はしに戒心と本蓮房が見える。池には水があり、林泉と築山を見せている。御玄関の広さ、庭の広さも充分に判る。当時の摂関家の山荘を見ることが出来る。

二

上人退出のとき、公は先きに庭においでになったものである。勅修御伝の巻三十三には

禅定殿下は忠仁公十一代の後胤、累代摂録の臣として、朝家の憲政、詩歌の才幹、君これをゆるし、世これをあふぎたてまつる。栄花重職云云

と謳われる名家であり重臣中の重臣であった。

公が先きにお庭においでになっていたことは、上人に対し厚い尊敬と信らいを持っていたからである。

その公が頭光踏蓮の上人を拝したのである、誠心誠意心をかたぶけておおくりしたのである。側にいた戒心と本蓮房とは、その奇瑞を見おとしたものであろう。或は公ほど信仰が熟していなかったからかも知れない。

池の橋は、これから「頭光橋」と呼ばれるようになったのである。

公が庭上に坐られたことは、外見を飾ることなく、心の命ずるままに、位人臣の最高にあることなぞ念頭になく実行されたもので、いかにも立派である。御伝には、

この後は、いよいよ仏のごとくにぞ、うやまひたてまつられけり。

と伝えている。

三

時は、承元元年三月、法性寺境内には、月光下花模様が美しく地上をかぎっていた静かな夜である。

小御堂から灯が見え、相対座しているのは、上人と公とであった。

上人は、会者定離のことわり、念仏本願の功力を語り、

浄土の再会甚近にあり、今の別は、暫の悲しみ、春の夜の夢の如し

と告げ、名号を唱え、同一光明のうちにあって、同聖衆の護念を蒙ること等、いろいろと物語があった。

公は、四国迂座の上人をなぐさめるための一夜ではあったが、

一言もの給はざりけり

と、ただ悲哀にくれておいでになったのである。公のす直さをよく現わしている。

三月十六日鳥羽の草津から、上人は乗船されたのであった。この後、公は毎日悲嘆にくれていられたが、

日来(ひごろ)の御不食、いよいよ重くなられ、中納言光親卿を呼んで、いろいろと遺言するところがあった。

四月五日、御臨終正念、念仏数十返、ねむるがように往生された、五十八才である。

思えば二年前の四月五日、月輪山荘で、上人の頭光踏蓮の奇瑞を拝んでいることは公の往生の前兆であったかと思い合されるものがある。上人と公との宿縁と申すべきか。

× × × ×

三途の業

太田康雄

上人の法語は、別にとりたててこと新らしいことを述べられてはおりません。日常われわれが生活をしているその姿を、静かにながめさせてくれるだけです。そして柔かな口調で、その実際を指し示してくれるだけです。しかしながら、何とわれわれは、このあたりまえの生活を忘れていることでしょうか。いやただこの毎日毎日を生きていると言うそのこと自体を忘れていることでしょうか。丁度今吸っている空気のある事さえも忘れて、唯何と言うことなしに生活しています。

更にそれだけではありません。唯何と言うことなしに生きているばかりではなしに、毎日何と言うことなしに自らの欲望に追われる様に生きています。この私が生きていると言うことさえも忘れて、唯その日の気のむくままに、私を追いまわしているに過ぎません。

今日は花見だ、今日は月見だ、やれ米だやれおかずだと、その日の生きることにのみに追われ、それを反省する機会さえありません。未だそればかりではありません

法然上の御法語に

或は金谷の花をもてあそび、遅々たる春の日を、むなしくくらし、或は南楼に月をあざけりて、漫々たる秋の夜をいたずらにあかす。或は千里の雲にはせて山のかせぎをとりて歳をおくり、或は万里のなみにうかびて、うみのいろくずをとりて日をかさね、或は妻子眷属に纏はれて恩愛のきずなきりがたし。

として、われわれの日常生活を美しい文で書かれています。まことに斐々として尽きぬこの美文は、上人の文学的な才能を余すところなく示しています。皆様のよく御存知の一枚起請文にしましても、小消息にしましてもまことに美文であります。とりわけ私は、たまたま掲げました、この法語と、「無常迅速」の法語を愛読いたします。

しかしながら、単にそれが美文であるから愛読するのではありません。声をあげて、音声ろうろうと拝読しますうちに、その美文の蔭から、生々しい人生の姿を示し出され、知らず知らずに人生の何ものかを教えられ、そしていつの間にか慄然とする様な私の姿に立ちどまらされるからであります。

或は執敵怨類にあひて瞋意のほむらやむことなし

と言われて居ります通り、怒りと、にくしみに、又私を追いまわして居ります。これが、殆んどわれわれの生活の総てでもあります。何時の間にか、私の私であることさえも忘れはてて居ります。

上人は、こうした生活を省みられて、

総じてかくのごとくして、昼夜朝暮、行往坐臥、時としてやむことなし。ただほしきままに、あくまで三途八難の業をかさぬ。しかればある文には、一人一日の中に、八億四千の念あり、念々の中の所作皆是れ三途の業といへり

と喝破せられて、われわれ日常生活のすべては、「三途の業」だと仰せられました、まことにゆえあるかなと反省せしめられるものであります。

はたしてこうした日常生活の為に、三途の河でとんだ苦しみを受けるのかどうかは、未だ見ぬ先の世界でありますから、何とも申せませぬが、考えてみれば、まことに、無意味な生活にわれわれは追われている様に思わずにはいられません。当り前のことをしていると自らは思い又他にも思い及ぼし、ただ負けじと意地を張っている中は、何も分らず通して居りますが、こう言われてみると、冷汗三斗の思いをせざるを得ません。上人は、この恐ろしい反省をまだまだ説いています。

かくのごとくして、昨日もいたずらにくれぬ、今日も又、むなしくあけぬ。いま、いくたびかくらし、いくたびかあかさんとする

全くのところ、今日の一日をやれやれと終ったとき、思わず一日を反省してみて、何の為にこんなにあくせくしたのだろうと思うことがよくあります。今日も又、明日も又と暮れ行くのです。だれが、このことを慄然とせずしておられましょうか。

ここでは、上人は、それだからどうせよと、くどくどしくは述べていません。それだけに、余りにも何物かを反省せしめられます。いや、むしろ、こうせよと教えられぬだけ、何か恐ろしい様な気もします。丁度母親に、くどくどと説教されているときには、馬耳東風と聞き流しているのですが、父親に簡明に行為の反省だけを指しめされると、とても恐ろしいものが後に残り、息さえも出て来ぬことがあるようなものです。

「柔よく剛を制す」と申しますが、この短かい文の中にはまさに頂門の一針の様な、言外の指数が、充満している様に感ぜられてなりません。上人の円満な顔に、目だけが異様に光っている様でもあります。

この言葉の中には、一つも無常と言う様な悲しい響きはありません。

それだからと云って、今日もいたずらに、明日もいたずらに生きていてよいのであろうか。いや、そうした争いの中に、何かもつと生き甲斐を発見しなくてよいのであろうか。そうした反省を、この法語は、いつも変りなく教えてくれます。

身辺雑記（六）

他人のこころ

森　赫子

先日、最近失明された友人がしょんぼりしているから、一度逢って話をして下さいとの知人からの依頼で、約束した日にお待ちしていると、その方はやさしそうな奥様に手をひかれて、八階の私のアパート迄わざわざ尋ねてこられました。いろいろ様子を伺い乍ら私も見えない事では先輩の様な気分になって、見えない事位大した事ではないとか、却って見えていては出来ない新しい生活への切り換えが出来て楽しいとか、つい調子にのって自分の生活の仕方や字の書き方、仕事のやり方など随分一生懸命になってしゃべってしまいました。

二時間程して子供達の帰って来ない内にとその御夫婦が帰って行かれてから、私はどうも少ししゃべり過ぎた様な気がして、もう一度お二人の様子を思い浮べていました。生活の心配はない御様子だし、奥様はお茶を飲むにも歩くにも行き届いてお世話をしていられる様子だし、「奥様がいられるからお仕合せですネ」と云った時、「えええその点では本当に幸福です」と笑って云っておられたのがとても嬉しそうだったし、今差し迫って苦しんでいられるような

扉の御法語

外面だけの努力、形だけの整備ではなにもなりません。なにごとも誠意をこめて行わねばなりません。この真実のこころが即ち至誠心であり、お念仏に欠くことのできない心得であります。従ってお念仏を申す人には、うそつきはなく、怠け者はいないわけです。

この御法語は「要義問答」に出ているお詞で、三心を口にして説明されたものの一部で至誠心とは真実の心なりと、善導大師の証明を引用されて説かれたものであります。

またこれと同じことが、二位の禅尼に進ぜられた「浄土宗略抄」にもあります。即ち

「ほかにかしこき相を現して、うちには悪をつくり、外には精進の相を現じて、内には懈怠なる事なかれという意也。かるがゆへにほかには賢善精進の相を現して、うちには虚仮をいだく事なかれといへり。（中略）

ただうちの心をまことにて、ほかをばとてもかくてもあるべき也」

とあります。

誰でも外面だけは賢しく善良らしく、いかにも職務にはげみ信仰深そうにするものであります。しかしこれだけでは「ほとけの御

処は何処にも見受けられませんでした。

それならどうしてこんな所迄お土産を持ってわざわざ見えたのか、どうも少し腑に落ちない気持です。そしてやっと私は、何も先輩顔をして一生懸命に偉そうな事を云う必要のなかった事に気がついたのです。多分見えない者同志の感じる親しさとでも云うのか、そんな者同志で話し合う事のなぐさめ合い、つまり、むしろ御自分より私の方を慰めてあげよう位の気持で見えたのかもしれません。それにしても私の態度はそんな雰意気に凡そぐわないものだったので、さぞガッカリされたでしょう。

人と云うものは、悲しい思い出の中に浸って楽しんでいる様に、他人から見て不幸に思われる環境に置かれている時でも、結構その中で楽しんでいたりするものです。そして気付かずにしゃべり続けた自分が、急にひどく恥かしく思えて来ました。私の中にも、失明は不幸とか気の毒とか勇気づけてあげたいとか、そんな観念的なものが残っていたのかもしれません。言葉や人の表面だけでなく、相手の気持を察すると云う事はやはり難かしい様です。

外では豆腐屋のラッパが夕方になった事を知らせ、空にはジェット機がうなりを立てて通り過ぎていました。と突然、すぐ私の近くでチーチーと小鳥が鳴くのを聞きました。多分戸惑って八階のビルのこの部屋へ飛び込んで来たのでしょう。張りのある美しい声でゆっくり三声長く鳴くと、又窓から飛び去って行きました。それは雀で、こちらを真正面に向いて何かを告げる様に鳴いて行ったそうです。私は見えない目でぼんやりとその後を見送り乍ら、今残して行った鳴き声が、喜びの声であったのか、それとも戸惑って入って来た人間の部屋に驚いた声であったのか、仲間を離れた悲しみの声であったのか、信じる事はやさしいが、理解すると云う事はなかなか難かしい事だと考えていました。

（六回に亘って御執筆いただいた「身辺雑記」は今回で終らせていただきます。）

（編集部）

意」にかなわないことはいうまでもありません。念仏を申す人は、これとは逆で心の内には真実の心をもち、外面は自然のままで特に飾るが如きことのないのが、そのすがたであります。

こうしてみると、念仏を申さぬ人たちがいかに多いか、いや滅多にはいないことに気がついて愕然とするのであります。他人を指して「あれはほん物でない」「あれは浅薄だよ」等々、やたらに批評する人があります。これは自分を賢しそうに飾りたい人に多いようです。また他人の善良さを尊重しない人があります。なるべく狡く、他人を押しのけて余分の利を欲し、上手に立廻るのがよいことのように思っている人があります。他人の考えを軽んじ、自我を通す人があります。こうして挙げてゆくと限りない位で、いずれも「ほとけの御意」に遠い人であり、お念仏を申していない人たちであります。

上人は「内にまことをおこして、外相をば機嫌（その時の折ふし）にしたがふべき也」と申されています。お念仏、即ち直実の心はあみだ様のお力なくしては得難いものであります。

石川啄木⑤

——法然へ還る道——

須藤隆仙

死と啄木

『細君たちは口うつしに薬を注ぐやら、唇を濡らすやら、名を呼ぶやらしてゐたが、私はふとその場に彼の長女の（六才だったと思ふ）居ないのに気がついてそれを探しに戸外に出た。そして門口で桜の落花を拾って遊んでゐた彼女を抱いて引返した時には、老父と妻君とが前後から石川君を抱きかかへて、低いながら声を立てて泣いてゐた。老父は私を見ると、かたち改めて、「もう駄目です、臨終の様です」といった。そして側に在った置時計を手にとって「九時半か」と呟く様に云ったがまさしく九時三十分であった（中略）三四丁離れた医者から帰ると老父と細君とはただ二人きりで手速く部屋を片附けてゐた。何といふ惶しい臨終だろうと、今までとやや場所をかへてひっそりと置き捨てられてゐる彼の遺骸のそばに坐りながら、かぶせてあった毛布を少し引いて彼の顔を見てゐると、生前と少しも変らぬ様子にしか感ぜられぬのであった』

彼が死ぬ時。友人としてたった一人その枕辺におった若山牧水が綴る彼の死の時の模様である。（読本「石川啄木の臨終」）明治四十五年四月十三日午前九時三十分、享年二十七才、東京小石川久堅町、子が拾う桜の落花と共に、彼も落って行ったのであった。

死ぬ直前の日記やその他に、宗教に関する言葉は一つも現れて来ていない。

彼の日記の中で、『宗教』という言葉が最後に使われているのは、私の調べに間違いがなければ死ぬ前年の明治四十四年三月一日の『西川光次郎君来り、宗教的情調といふことについて語る』という部分である。

西川光次郎は彼が二十三才（明治四十一年）の正月、小樽へ来て社会主義演説をしたのであるが、当時小樽日報の営業事務長と喧嘩して同社を退き、失業無一文の彼は西川らの演説を聞き社会主義思想を全面的に受入れたのであった。この西川と語った宗教談が、日記の中で宗教を語る最後となっているのも面白いことである。

尤も歌の中では「死」というものを歌ったものがいくらかある。

○大といふ字を百あまり砂に書き、死ぬこ

とをやめて帰り来たれり

○「さばかりの事に死ぬるや」「さばかりの事に生くるや」、止せ止せ問答

○いくたびか死なむとしては死なざりし、わが来しかたのをかしく悲し（一握の砂）

○今日もまた胸に痛みあり死ぬならば、ふるさとに行きて死なむと思ふ（悲しき玩具）

勿論これらの中に「死」というものに対する宗教的関連など見ることはできない。死に対するニヒルな感情が出ているだけである。

そして彼には「死」というものを一種の感傷的事実として弄んだかのく如く見受けられる部分もある。

明治四十二年（二十四才）四月十日の日記には

「死だ、死だ、私の願いはこれたった一つだ、ああ、あ、あ、ほんとに殺すのか待てくれ、ありがたい神様あ、ちょっとホンの少し、パンを買うだけだ、五、五五銭でもいい殺すくらいのお慈悲があるなら」

と記している。「死」というものが一つの思想的遊戯だったのでもある。

やはり同日の日記に

「病気、人の眠うこの言葉は、予には故郷の山の名の様になつかしく聞える、——ああ、あらゆる責任を解除した自由の生活、一年ばかりの間、いや一ト月でも、一週間でもいい、神よ、若しあるなら、ああ、神よ、私の願はこれだけだ、どうかからだをどこか少し毀してくれ、痛くてもかまはない。どうか病気さしてくれ！

ああ！　どうか……」

とも記している。

死に対する考え方もこれと同じように無責任なものだったと想像される。

しかしこのような啄木も遂に死んでしまった。それは遊戯でもなく、無責任でもなく、今度こそ本当に、偽りのない事実として死んでしまったのである。

啄木の思想とか文学とかいうものに対する後人の批評を見ると、多く二十七才で死んだ彼を、二十七才だけで完結したものの如くに

しらじらと氷かがやき千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

（釧路の啄木歌碑）

見て批評しているもののみが目につく。

端的にいえば〃二十七才で死んで惜しかった〃というような、後を惜んだものを見ない。この点については私はその道の専門家ではないので何ともいうことができない。

しかし私が今問題としている、宗教との関連に於ける啄木を見る時、二十七才の死は何とも惜しいことだった、と悼れてならない。前述の如く彼には第二の宗教の芽とでもいうべきものが芽生えていた。これが花を咲かせ実を結んだ場合、恐らく彼の宗教に対する思想は、その豊富な人間経験、特に希有な秀才として、歌人として、又詩人として、更には思想家として、これらを総合した基盤の上に立ち、実に貴重なものとして衆人に多くの影響を与えたことであろう、と想像されるのである。

かってはあれ程までに樗牛あたりの思想に心酔していた彼、その彼が一たび第二の段階に入るや蹶然としてこれを一擲、厳しく批判していった彼、彼こそは常に真実に向って泥まみれになっていった人間だったのである。

試みに彼が明治四十三年『時代閉塞の現状』なる評論の中で樗牛を批評した部分を転記してみると次の如くである。

『樗牛の個人主義の破滅の原因は、彼の思想それ自身の中にあった事は言ふまでもない。即ち彼には、人間の偉大に関する伝習的迷信が極めて多量に含まれてゐたと共に、一切の「既成」と青年との間の関係に対する理解が遙かに局限的（日露戦争以前に於ける日本人の精神活動があらゆる方面に於て局限的であった如く）であった。さうして其思想が魔語の如く（彼がニイチェを評した言葉を借りて言へば）当時の青年を動かしたに拘らず、彼が未来の一設計者たるニイチェから分れて其迷信の偶然を日蓮といふ過去の人間に発見した時、「未来の権利」たる青年の心は彼の永眠を待つまでもなく、早く既に彼を離れ始めたのである。』

この先には「樗牛は後年彼の友人が自然主義と国家的観念との間に妥協を試みた如く、其日蓮論の中に彼の主義対既成強権の圧制結婚を企ててゐる」ともいっている。更にこの後に「この失敗は何を我々に語ってゐるか。一切の〃既成〃を其儘にして置いて、その中に自力を以て我々が我々の天地を新に建設するといふ事は全く不可能だといふ事である」と記しているのである。即ち「既成」の上に新天地を開くということの不完全さを樗牛の思想例の上に力説しているのであって、このことは皮肉にも彼の宗教思想そのものにもあてはまるようである。彼は宗教的にも既成の上に新天地を開くことはできなかったのである。

しかもこの評論は更に続けられ、樗牛から離れた「我々」（この場の我々は青年一般を指していっているのであるが、これは啄木自身と見ていった方がよいように私には思われる）は第二の経験「宗教的欲求の時代」に移り、次で第三の経験「純粋自然主義との結合時代」に入ったと論じているのである。

第二の宗教的欲求の時代とは個人意識の勃興が自らその跳梁に堪えられなくなって求められたものではなく、初めの「自力によって既成の中に自己を主張せん」としたのが、別に「他力によって既成の外に同じ事を成さん」としたまでである、というのである。そして「第二の経験も見事に失敗した。我々は

彼の純情にて且つ美しき感情を以て語られた梁川の異常なる宗教的実験の報告を読んで、其遠神清浄なる心境に対して限りなき希求憧憬の情を走らせながらも、又常に、彼が一個の肺病患者であるといふ事実を忘れなかった。何時からともなく我々の心にまぎれ込んでゐた〃科学〃の石の重みは、遂に我々をして九皐の天に飛翔する事を許さなかったのである」と述べ、第三の純粋自然主義との結合時代に就ては「此時代には、前の時代に於て我々の敵であった科学は却って我々の味方であった。さうして此経験は、前の二つの経験にも増して重大なる教訓を我々に与へてゐる。それは外ではない。〃一切の美しき理想は皆虚偽である！〃」と述べているのである。

この『時代閉塞の現状』は「強権、純粋自然主義の最後及び明日の考察」と副題され、彼の劃期的評論とされるものであるが、先の樗牛批判の部分が啄木自身の宗教思想にあてはまると同時に、この第二、第三の経験の敍述も又、彼の宗教思想遍歴をそのまま現わしている、ということができるのである。

「彼の宗教」観の通暢は既述の通りで、それと校比すれば直ちに頷かれることでもあるが、即ち十八、九才の宗教的樗牛時代は、いわばこの評論に述べられている第一の時代であり、〃既成の中に自力を以て自己主張する〃とはこの頃の法華経などを基にして自我意識を高めていた彼にあてはまるのであり、二十才頃の梁川の「霊的感応」に傾倒していた時は第二の時代〃他力によって既成の外に自己を主張し〃ていた時にあてはまるのである。そして二十二才以後の普通無神論時代といわれているものは第三の純粋自然主義時代にあてはまるのである。

更に彼は次の如く続けている。

「かくて我々の今後の方針は、以上三次の経験によって略限定されているのである。即ち我々の理想は最早〃善〃や〃美〃に対する空想である訳はない。一切の空想を峻拒して、其処に残る唯一つの真実――〃必要〃！これ実に我々が未来に向って求むべき一切である。我々は今最も厳密に、大胆に、自由に〃今日〃を研究して、其処に我々自身にとっての〃明日〃の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である。

更に、既に我々が我々の理想を発見した時に於て、それを如何にして如何なる処に求むべきか。〃既成〃の内にか。外にか。〃既成〃を其儘にしてか、しないでか。或は又自力によってか、他力によってか。それはもう言ふまでもない。今日の我々は過去の我々ではないのである。従って過去に於ける失敗を再びする筈はないのである」

ここには又彼の宗教思想の、新しい展回（第二段階の宗教へ向う心）をあてはめてみることができるのである。即ち既成に対する態度として、過去の失敗を二度と繰返すようなことはないであろう、といわれた如く、恐らく宗教の面に於ても、彼の生命が二十七才以後幾年でも延びておったならば、過去の失敗、絶頂迄来て落された、あのような失敗を二度と繰返さなかったであろうし、今度こそは真に新しい、本当のものが生れてきたであろうと期待されるのである。

しかるに二十七才で死んでいるのであって、誠に残念な限りである。右の「時代閉塞の現状」も、当時の青年を問題としているようではあるが、先にも述べた如く「我々」と

用いられている語は、啄木個人にあてはめられるのである。したがって私はこの評論が偶然にも彼の宗教とも関係する思想に於て、私のこれ迄継述したことと実によく符合することを嬉しく思うものである。

この評論は二十五才の時のものであるが、二十七年という短い彼の人生の中で、晩年の思想の円熟さの、更にその初門を現わすもの、ということができると思うのである。

したがってこの評論からいってみても、彼が単なる虚無主義者であり、無神論者であったということはいえないのであって、むしろ彼こそ本当の意味で「人間の真実」というものに取組んでいった、一つの探求者ということができるのである。窪田空穂氏は彼を「自身に対して極めて誠実であった」といい「これは言いかえると人生に対して誠実であったということである」と評しているが（『死の直前直後の石川啄木に対する評価』読本）私は今彼の宗教思想の上に、この窪田氏の言葉を心から替同するものなのである。

彼がローマ字で書いた日記を読むと（彼の日記は総べて秀れた文学的価値を有しているが、特にこのローマ字の日記が秀逸で、これは愛妻に読ませたくないためにローマ字を用いたといわれている。先の42・4・10のものはローマ字日記の一部分である）明治四十二年（二十四才）朝日新聞の校正係となって、一人で東京暮しをしていた頃はずい分デタラメな生活だったことが知られる。夜の女と遊んだことが実に克明に記されている。そして彼自身も自づから虚無主義者と自嘲しているが、果して彼は普通いわれているよう虚無主義者であったであろうか。否断じてそうではない。思想の上にあれ程真剣に明日を求めている彼が、どうして虚無主義者であろうか。

とにかく彼の二十七才での死はこのような意味合いからも非常に残念なのであって、彼が無神論者ではなかったということも、同様に二十七才の死ということで暈かされているのである。

彼が晩年に於て到達していた、あの無神論の中の『有神論』、無宗教の中の『真宗教』こそ、この問題に関する限り絶対見逃してはならい重要と思われるのである。（未完）

自然

昔から人は土より生れ、土にかえるといわれているが、現代の我々の生活は何にか機械化されたような世の中に生きているようで、毎日毎日が歯車に乗せられてきしむような生活をしている。

こんな時代にこそ人は自然に生かされている事に、又自然のふところに抱かれていることに気がついたらと思う。

日本はよくいわれるように、春夏秋冬の気候がはっきりと別れておとずれ、風の動きにも木々の花の咲くのも、鳥や、ま草花、虫の鳴くのも、それぞれに時候を知らせて来れる。

このめぐまれた自然を対称に私たちの先祖は俳句等の我国独特の季題を重ずる文学を生んだ。

オートメーション化されたような社会機構の中に於ても、世界にほこれる日本の自然の美しさの中に生きている事を思い出して生活したいものだ。

新編 百喩経 (6)

一六 失った毛髪

Mさんの家に、娘さんがいた。どうした事か、生れた時から、髪の毛が無かった。女の子だけに、両親の心配は、一通りで無く、医者、祈禱、呪、薬と、良いという事は、何でもやって見た。

その心が現われたのか、ヒョロヒョロながら、毛が少しばかり、生えてきた。両親の喜びは、想像しても判る、その僅かな毛を、宝のように、大切にしていた。

処が近所の人から

「それは刺ったら濃くなる」

といわれ、思い切って刺ってしまった。しかし濃く生える筈の毛は、

それっきり生えなかったのだ。

愚かな理論は、とかく失敗が、訪れてくるものだ。

一七 経済とは

アメリカの、フォード自動車会社で、社員の入社試験を行った。

それは、細紐で、しっかりと荷造りされた小包を、ほどくのが、その問題なのだ。

紐を、はさみで切ってもよし、時間をかけて、ほどいてもよい、それは本人の自由であった。

そしてその結果は、はさみで切って、取り出した者が、採用されたのだった。

物資が豊富で、スピードを要求し、労力を軽減する、アメリカでは、当然そうであろう。もし青砥藤綱の、美談とされていた、日本だったら、紐をほどいた者が採用されたにちがいない。

物資の少ない、貧しい日本は、能率より、物が大切だった。

一八 大山鳴動

明和のころに出た「楽牽頭（がくだいこ）という、一口ばなし集があるが、その中に、「儒者」という題で、

一人の儒者が、品川へ引越したので、弟子たちが、お祝に行き、

「先生は、暖かな日本橋から、どうしてこんな田舎じみた、品川へお越しになったのですか、何かお考えが、おありと思いますが」

と尋ねると、その先生たる者、至極まじめな顔で、

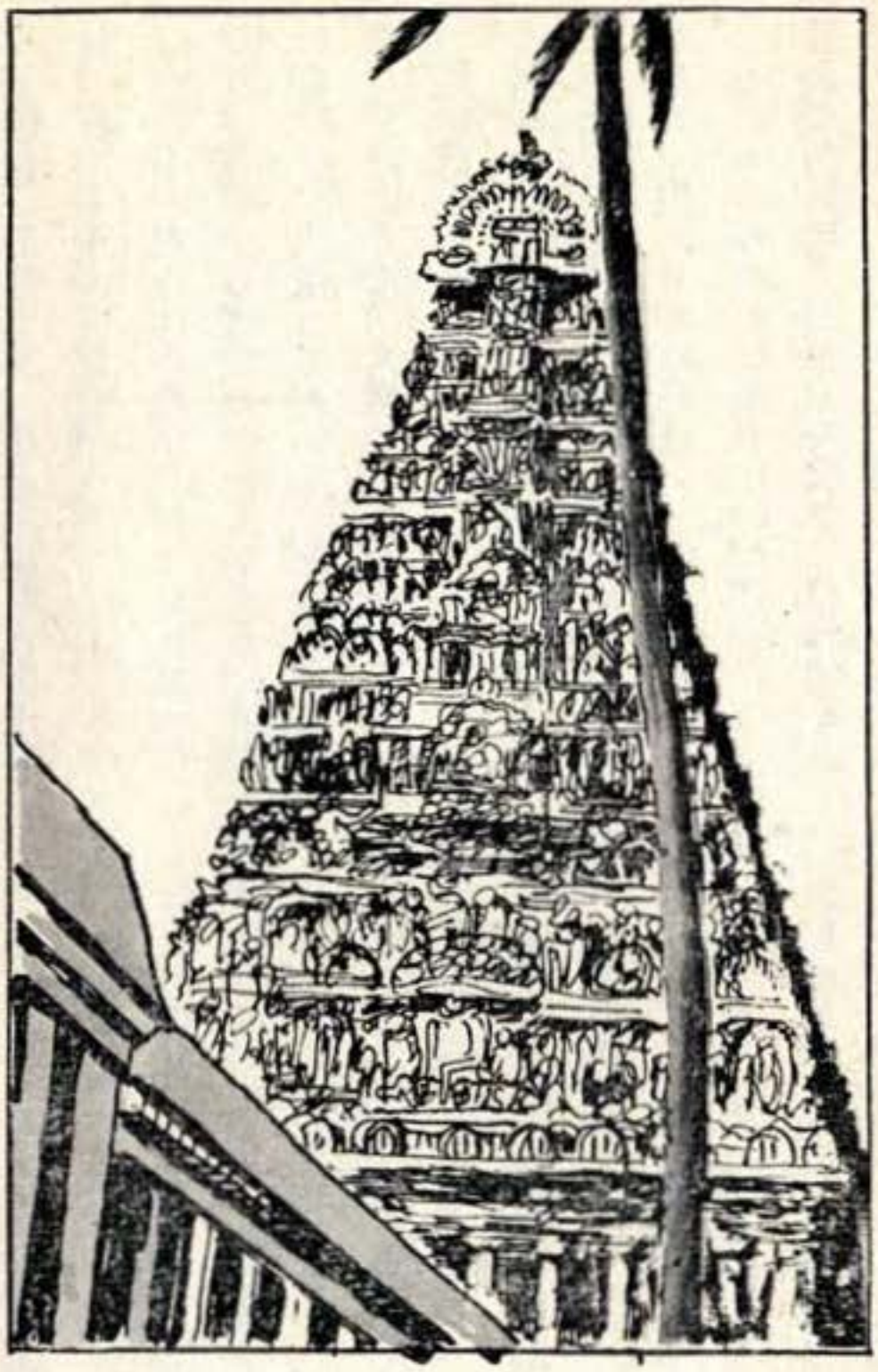
「唐へ二里近い」

といった。

兎角物事を、大げさに考える人は、此の先生のように、判断するものだ。こんな人物に限って、大げさなお膳立をしながら、でき上った結果は、それ程のものでないことが多い。誇大妄想ならぬ、過大評価狂とでもいうか。

（伊東挙位）

× ×



創作

世尊と阿闍世

—第一回—

鶴田湛泉

一

その頃、魔掲陀国は覇を四隣にふるっていて、印度第一の強大さを誇っていた。

国王の頻婆沙羅（ビンバシャラ）は、艶麗たぐいない王妃韋提華夫人にかしづかれ、仁政を施して国民にしたわれ英邁の聞え高く、至福の頂上にあった。

けれども未だ世嗣に恵まれなかったので、それのみが王にも国民にとっても満されない唯一の願いであった。

既に中年をすぎていた王にとっては、心淋しくやるせない思いであった。

篤信家であった王夫妻は処々方々の神々に、子宝をさづけ給われとひたむきな祈願をこめていたが、いかに国王の権威を以ってしても、これのみは思うようにはならないことであった。

思い余った王は、或日、街の卜者を王宮に召して、果して子なきや否やを占わせて見た。

暫し王妃の相貌を仔細に相し占っていた卜者は、

「王さま、御心配なされますな、お子様は必ずさずかりまする」
王は、よろこびを満面にただよわせて、
「まことにさようか」
「ハイ、……私の存じまするさる深山に、年老いた仙人が永年棲んでいますが、その仙人が寿命の終りまするとともに、王妃の胎内に宿るからでございまする」
「しかし、その仙人は、いつ頃生れ変ってくるのか」
王は、早くその時期が知りたいのか、重ねてきき返した。
更に、占っていた卜者は、
「……今から三年後のことでございます」
「何！三年後のことか」
三年後ときかされて王は嘆息を洩らさずにはいられなかった。
今直ぐに宿ってほしいと思っているほど焦っているのに、三年向うとは自分の年令を考えると、とても待ち切れない思いにとざされるのであった。
その後、時折に焦燥のことばを洩らして種々案じ煩うている王の容子に深く同情してか、
夫人は終に恐るべき計画をすすめるに至ったのであった。
「三年向うといいますのは、その仙人にまだ寿命がそれだけあるからでございましょう。仙人には気の毒ですが、その仙人の寿命さへなくしたらすぐ宿るのではないでしょうか。第一この先幾ら生き永らえても、そんな仙人には仕合せはないと思われます。それよりも王様の子として一日でも早く生れた方が、どれほど仕合せか知れないと思います」
魔魅のような恐ろしい謀計が、高貴で艶麗な王妃の胸中に、ふと湧き起ったのであった。
今は我が子欲しいとの一念に盲目となっていたのか、夫人の言葉をこれこそ妙計と思い込むに至った王は、早速家臣をその山へ遣した。
仙人を、やっと捜し訪ねた家臣は、
「この国の大王、後嗣がないので処々の神々に祈願していられるが未だ恵まれない。たまたま卜者に相せしめたところ、その卜者の言葉に、あなたが三年の後、命を終へると同時に王子として夫人に宿るという。願くば大仙慈悲の心をもって速かに冥府へ赴き給わぬか」
つぶさに王の衷情を述べて、辞を卑くし言葉をつくして願ったのであった。
かしこんで王の命をきいていた仙人の顔色は一瞬変ったが、直ぐ平静に戻ると、
「わしは、三年を経て初めて命を終るものであります。たとへ王の命令でありましても、いかに請われても今直ちに命を終ることは出来ませぬ」
と拒んだ。
命の惜しいことは、たとい仙人といっても同様であった。
家臣は王城にやむなく帰ってありのままを復命すると、王は言下に努気を現わして、

「わしはこの国の王であるぞ。この国に居る者、この土地に住するものはわしの臣下でない者はない。わしの自由にならぬ者はいないはづである。しかるに、礼をつくし言葉をつくして頼むにもかかわらず承知せぬとはききすてならぬ、今一度頼んでもきき入れぬ時には、剣にかけても彼の命を奪って参れ！」

と厳しく命じた。

己の希望を達するために盲目となってしまった王は、ただ子宝ほしさの一念のため王者にあるまじき行為をあえてしてしまった。

家臣は再び山にわけ入って仙人に会い、重ねて懇願したが、承知する容子は更にない。

この上はやむを得ぬと、剣を抜いて仙人に迫った。枯木のような仙人は、あわれ鮮血を浴びて其の場に倒れた。

「帰って王に告げられよ、わしの命が未だつきないのに王は家来に命じてわしを殺すなれば、わしも亦必らず人に命じて王を殺めるであろう」

はったと睨む形相ものすごく、苦しい息の中にも、呪いの言葉を吐いて果ててしまった。

ところが、不思議なことに、王妃はその月から身重となられた。

初めて胎動を身に感じた夫人は悦びに満ち、王舎城内はやがて生れる御子に希望をかけて、侍女の顔まで明るく喜色があふれていた。

王は再び卜者を呼んで、夫人を観せしめて、

「胎児は男子であるか、それとも女子か」

とたしかめようとした。

相し終った卜者はうやうやしく

「正しく男子で、決して女子ではございませぬ」

「たしかに男児か」

「ハイ　さようにございまする」

確信のこもった卜者の言葉に、王と夫人のよろこびはただごとではない。

「しかし、……おそれながら、いささか心がかりなことが……ございまする」

声をひそめていい出し難そうである。

「どうした事か」

王は、いぶかしげにききかえした。

「されば、胎児は正しく太子さまに相違ございませぬが、恐れ多いことながら、何故か王お二人方をひどく恨んで宿っていられまする。それ故、成人の暁には、きつとお二人に仇をなされる方でございましょう」

卜者の思いもよらぬ一言に、王夫妻の驚きと落胆とは大きかったのはいうまでもない。

やっと気を取り直して、心を広く大きく持とうとした王は、

王子が生れたなれば、この国のものはすべて王子に譲るのであるから、別に何も心配することではない」

と夫人の心を鼓舞し励まそうとした。

しかしいかに強気なことをいっても、矢張り気持の悪いことは、

王も同然である。
あれほど望んでやっとさずかった子宝が、自分等の仇敵になろうとは、宿命の恐ろしさに内心おののかずにはいられなかった。
それ以来、夫人にとっては、宿業の我が子を産むことはよろこびであるどころか、日一日と苦痛となって来た。生れてからどのような恐ろしいことが起るかも計り知れないと思うと不安に駆られ憂鬱とならざるを得ない。
「神よ、生れ生づる太子に祝福をたれ結へ」
と胎児の前途を祈るべきであるのに、一そのこと、生れ出でるよりはと、夫人は幾度となく堕胎を試みようとさへした。
けれども若し堕したなら、どんな禍が襲い来るかも知れない不安があったし、健康にも悪い影響を及ぼすことを考えると、尚更おそろしいことであった。それ故、王になだめられて、夫人の意志はいつもくつがえされていた。
しかし、夫人の深いため息を見る度に、そのまま捨てて置くことも出来なかった王は、或日、こうしてはどうかとすすめた。
「出産の時に、人知れずひそかに高楼の上から、劒を立て並べた床上に産み落したならば、おそらく生きてはいないであろう。さすれば我等の憂を除くことも出来るし、又世にも知られないですむではないか」
将来、自分達が全然期待を持ち得ない我が子であって見れば、産れ落ちて親子の愛情の湧かないうちに、生れると同時に亡きものにして暗から暗へほうむろうと、醜悪な利己的な考えから血も涙もない冷酷な計を思いついたのであった。
やがて月満ちると、かねての計画通り高楼から産み落したが、嬰児は幸か不幸か、床上でココの声を高くあげていた。侍女達は、余りの惨忍な処置と考えて、立ち並べられた劒をあらかじめ取り片づけてしまったものらしい。
まるまると肥った玉のような可愛いい嬰児の姿を眺めて、侍女達はさすがに優しい女心から、王夫妻に内密に秘かに育てることとしたのであった。
幸に身には何の怪我も受けていなかったが、何しろ高い所から床上に産み落されたので、小指一本が折れていたのか屈伸の自由がきかないことが長ずるに従って明らかとなって来た。
「王子が生きている?」
其の後、幾年かすぎて、信じられないようなことをふと耳にした時、王夫妻は、ぞっとするばかりの驚愕を感じた。
さすがに血肉を分けた親子の情愛である。
驚きは、忽ちよろこびに変った。
「早々、つれて参れ」
王は、かっての自分の所業をすっかり忘れ果ててしまった如く、我が子を見たさの一念にかられて待女にこう命じた。
容貌も美しくすこやかに成長した可憐な王子の姿を一目見ると、どうしてそのままに捨てて置かれよう。
王子を早速王舎城へ引きとると、これまでのことを一切秘密にし、固く家臣の口をとめて太子として養育することとなった。

王夫妻の寵愛を一身に集め、聰明に生い育った太子は、阿闍世と呼ばれいつの間にか十六才の春を迎えていた。

ところが、一身の秘密を露知らずに育った無垢清浄な太子をそのかして、春風駘蕩たる王城を地獄の城と化し、王夫妻に生き地獄の苦をなめさせるような運命へと導いたのは外ならぬ提婆達多であった。

二

一生涯の間、世尊につきまとって反逆を企てたといわれる提婆は世尊と同年輩の従兄弟の間柄であったが、既に青春時代から世尊を敵視せねばならぬ宿命に置かれていた。

世尊が浄飯王の太子悉達多であった頃、妃を選ぶに際して一世の美人、耶輸陀羅姫を提婆と武技を競って争われた。

あらゆる武技に惨敗を喫してしまった提婆は、この時から終生世尊を敵として立たねばならぬ宿命を持つこととなったともいえよう。

世尊が成道後、五年目頃に世尊に帰依した提婆は、悟を開かんものと、真剣に経を誦し疑をただし、禅定をこらして十二年間よく道を修したので、世尊の所説を悉く誦するまでに達していた。熾烈な求道の心に燃えていた彼は、尚もその後二十年間という長い年月を真摯に修道生活を続けていた。

その頃、世尊の教団は既に尨大なものとなっていて、内には数千の比丘、比丘尼を擁し、外には多くの長者、国王達の帰依を受けて隆盛を極めていた。

諸王の中でも頻婆沙羅王の供養ぶりは特別なものであった。金銀、七宝、衣服、百味飯食等を毎日五百車に積んで世尊の在すところに送り、世尊と僧達に供養するという有様である。

提婆は既に七十の高令に達し、齒もかけ、皺深い容貌になりつつあったが、未だ真の悟道には達していなかった。

舎利弗、目蓮が教団の上首となって人々の尊敬を受けている容子を眺めて、彼はひとしれず悶々の情を抱いていた。元来、豪邁で人に下ることを好まない我の強い気象の彼は、焦燥感を抱かずにはいられなかった。

「自分には未だ舎利弗、目蓮のような神通力を持っていない」

こう気付いた彼は、人々の尊敬を集めるには、先づ神通力を得なければならないと思うに至った。

或日、神通第一といわれる舎利弗の前に膝を曲げて

「何卒、神通を教え給われ」

と願った。

「それならば、先づ四念処を学ばれよ。初めから神通を学ぶことは出来ない相談である」

提婆の目的は、ただ神通にあった。提婆にとっては四念処（身は不浄である。愛は苦である。心は無常である。法は無我であると観ずる四つの修行の実践方法）からという回り道など、焦慮にかられている彼にはとても出来ることではない。

舎利弗の言葉に失望と憤懣の念に駆られながら、やむなく他の尊者を訪ねて神通力を学ぼうとした。けれども誰も彼の願いを問題と

してくれず、先づ四念処を学ばれよといって直に教えてくれる者はない。

豪慢な彼も、今は我を折って弟の阿難を訪ねて行った。

「お前はわしの弟である。わしは神通を学びたい。一々順序の通りに教えてくれ」

と強いて願った。その言葉は威嚇的でさえある。

初果の悟りを得ていたが、まだ他心智の証(アカシ)を得ていなかった阿難は、深い計画から神通力を学ぼうと欲している提婆の心中を看破し得なかった。その上、気がやさしかった阿難は兄の願を拒りきれず、静処に於て一々手をとって教えた。

七日七夜、一心不乱に学んだ提婆は、我が身を自由自在に変化する術を成就することが出来た。

神通力を完全に身につけた提婆は、今や何者にもおそるることはないとの自信が湧いて来た。自分も教団の上首の地位につけるとよろこんだ。今こそ、舎利弗、目蓮と肩を並べることが出来る。彼等を押し除け、それ以上の地位につけるとうぬぼれ初めた。

それのみか、三十年来、欝勃として胸中にうごめいていた彼の不敵な野望は、神通を得たことによって一時に爆発したのであった。

自負心の強い提婆は、嫉妬心も人一倍強く深かった。世尊に代って教団を統理して、各国の諸王を膝下に跪かしめることが出来たならば、さぞ愉快だろうと思った。老の身の衰えた血管に、こんな野望の血が燃え初めたのであった。

野望を遂げるためには、強大な外護者を得る必要があった。この時、彼の胸中に浮んだのは外ならぬ阿闍世太子の姿である。

心に大きくうなづくと快心の笑をもらした彼は、周到な計画を立てて、太子に近づこうと、太子の御殿の前の空中で大神変を現わし初めた。

或は、身の上方に紅蓮の焔を吹き出し、或は身の下方に水をどっと噴出せしめた。

ややあって雲つくばかりの大身と化し、忽ち次に小児の如く小さな姿と変った。

今度は元の姿に戻ったと思うと、空中に坐し、或は横臥した。全く自由自在の変化を現わしたのであった。

この千変万化の容子を、驚きとともに、まばたきもせずにぢっと見守っていた太子は、余りの不思議さに、

「あれは　一体　何者であるのか」

と左右の臣に訊いた。

「あれこそ、まさしく尊者提婆さまでございまする」

「ウム、尊者提婆とな」

雀躍した太子は、手を挙げ空中へ、

「尊者……なぜ、ここへ降りて来ませぬ」

と喚び呼んだ。

太子の呼び声と共に忽ち空中の姿はかき消えてしまった。

と同時に、太子の面前に、世にも稀な美少年が立っていた。

金の瓔珞(ヨウラク)を身に装って、一種のなまめかしささえある艶なる姿である。

太子は少年の余りの美しさに、暫しうつとりと見とれていた。
静かに太子の許に進みよって来た美少年は、太子の膝にもたれ眉態を呈してしなだれかかった。小年の可憐さに、太子は思わずひしと抱きよせると、バラの花ビラのように美しい朱唇に、恍惚として母のようにやさしく接吻を与へた。
やがて、日頃の姿に戻った提婆は、
「提婆でございまする」
と太子の前に、うやうやしくひれ伏した。
提婆は世尊と同じような気品のある相貌の上、長年の修養から来た尊さと、どことなくおかし難さを持っていた。
尊者らしい提婆の姿と、彼の神変不思議の神通力を知るに至った太子は、完全に了魅し去られてしまった。一方、太子の心を完全に握った提婆は、事半ば成就とよろこんだのはいうまでもない。
提婆はおもむろに太子に、父王が世尊に五百車に種々の衣食を乗せて供養している模様を説いて協力を求めた。
今は提婆に心服してしまっている太子はきき終ると、
「私もあなたのみ弟子となって、父と同じように五百車の衣食を供養いたしましょう」
と躊躇するところなく誓ったのであった。
「太子さまのお志は、誠に結構にございまする」
快心の笑を現わして、提婆は太子をほめたたえた。
間もなく太子は、王舎城からほど近いヤウトヒタ山に僧房を新しく築いて提婆に、献じた。

これまでも提婆は教団に於て新則を提唱し世尊に容れられなかったが、僧房が出来上ると教団を離脱して叛旗をひるがえして新則をしきりに提唱し初めるに至った。
いつの時に於ても、祖師への反逆者や背徳者は、門弟の中や信者帰依者の中から現われるものである。
教団の中にも彼の新説に共鳴して教団を逃げ去って彼の許に集ってくる者も少くはなかった。何しろ釈迦族の血統をうけた偉大な体軀と、さながらに世尊に似た彼の偉貌は、彼等にとっても大きな魅力でもあった。教団を独立した提婆の名声が高まってくると、日ならずして五百の比丘を擁するに至った。
太子も彼との約束を守って、父王にならって毎朝五百車の種々の衣食を供養することを怠らなかった。
提婆が教団を分裂さしたことは、世尊の教団に取っても、すくなからぬ打撃と驚異であった。
教団が独立出来たという一つの希望が叶うと、彼のあくなき野望はますます馳り立てられて行った、世尊に代って教団を統理したいという法外な望みが、枯木のような彼の胸に湧いて来たのであった。この野望が起った瞬間、忽ち得ていた神通力を失ってしまったという。
彼には有力な弟子とてはなかったが、俱利迦、乾陀驃等四人の腹心の弟子を率いて竹林精舎へ赴いた。
世尊のみ前に詣でると、うやうやしく仏足を拝して、
「世尊はも早や老年に達せられて、力も衰えていられまする。諸

弟子のために法を説き給うことは誠に御苦労も多いことと思います。今後は、私が世尊に代って教えを示しますから、諸弟子をことごとく私に付属して下さい。世尊はただ禅定を修されて法の楽しみに住し下さい」

うぬぼれと権勢欲の強い彼は、世尊に向って教団を引き渡すよう心の驕りを昂めて申し込んだのであった。

並居る諸弟子は、倨傲な表情の提婆の身の程を知らない提言に、あつけにとられて互に顔を見合すのみである。

「提婆よ、私は舎利弗、目蓮のように智慧深く、修行も円熟している大阿羅漢にさへ大衆を付属していない。まして汝が如き名聞のみを求める痴者に、どうして大衆を付属することが出来ようぞ」

円満な世尊も、断呼と呵して許されるはづがない。

返すことばもなかった提婆は、其の場を悄然と退いたが、世尊の一言に胸を毒箭に射ぬかれたように感じた提婆は、

「世尊は舎利弗、目連を讃めたたえ、大衆の面前でこの俺を辱めおった。ようし、この怨はいつかはきつと報いてやるぞ」

と復讐の念に逆上したのであった。

これまでいつも彼が不快に思っていたことは、舎利弗、目連等の上首の弟子達が自分を軽んじていると感じたことであった。ところが、世尊からも軽んじられていると知った彼は、世尊に対しても怨が燃え出したのであった。

彼の野望は、いかなる鉄槌にも、うちくだかれそうもなかった。

（未完）

童心仏心

二人っ子

一人っ子は甘えん坊。二人っ子はどうでしょうか。片手落ちになると、残りの一人はひがみ屋さんの寂しがり屋になってしまいます。

牛小屋の中の、仔牛の太郎と次郎もそうでした。そこで母牛は、

「えーと。けさは太郎ちゃんが先だったわね。さあ、いらっしゃい。お顔を洗ってあげますよ。」

こういって、ペロペロンと太郎の目やにをとってやったり、鼻をかんでやったりして愛撫してあげます。太郎が終ると次郎の番です。そして、朝食の時には、

「今度は次郎ちゃんが先よ。よく噛んでたべるんですよ。そらそら。よだれがたれていますよ。ちゃんとふいてね。」

といった具合に、平等に子供の名前を一一呼んでは面倒をみるのでした。

毎朝の母親のこの祝福が、太郎の、次郎の明るい、親の愛情を体いっぱいに受けた楽しい一日になるのでした。

（桐）

信仰相談

解答者　竹中信常

お念仏とお題目はどちらがよいのか

―おたずね―

最近、週刊誌その他で、創価学会と寺院との争いの記事が伝えられておりますが、これは一体どうしたわけなのでしょう。

宗教というものは、平和を旨とし、愛を説くのが建前だと思っていたのに、その本家の宗教家同士が喧嘩をしたのでは、話になりません。どうしてこんなことになったのか、そのわけを教えて下さい。それに、私の家の近所にも大分創価学会の会員がいて、時々来ます。今までは、それとなく聞き流しておりましたが、余りしっこいので時には腹が立つことがあります。そんな時には、つい声高な喧嘩口調にもなります。宗教の話をするのにこんなことではいけないと、思いかえしておとなしく聞いているのです。しかし、このままですと、しまいには根負けをして、引き込まれてしまいそうです。どうしたらよいでしょうか。

私の家には、七十三になる老人（主人の母）がおりまして、病気でねています。学会の人は、あなた方の信仰がまちがっているから、病人がなおらないのだとくりかえしくりかえしいいます。ところが、病人は子供の時から口なれたお念仏がありがたいいまさらお題目は唱えられないと頑としていい張っています。学会の人は、主人がいわないのなら、あなただけでも唱えなさいといいます。題目を唱えると本当に病気がなおるのでしょうか。お念仏と題目とどちらがすぐれているのかお教え下さい。

（東京都板橋区氷川町・鈴木なみ・主婦）

人に強要されたものではなく、自分で目的を持って下さい。

―お答え―

本当に困ったことです。週刊誌に出ていたのは、創価学会と身延山との争いについてですが、このほかに、いま問題になっているのは、創価学会の会員――これは同時に日蓮正宗の信徒でもあります――が遺骨を他の宗派のお寺の墓地に埋めるのに、いざこざが起きているのです。元来、お寺の墓地はそのお寺の坦家の人々が亡った時にお骨をおさめるのが建前です。ところが、坦家としてお寺に墓石を持っていた人が学会に入り、お寺の坦家ではなくなってしまったのに、死んだから埋めさせろ。宗旨はちがうが墓地はおれのものだというのです。お寺の方では坦家として、お寺の宗旨を信仰しているものに限り墓地の使用を認めるといい、学会の方では、宗旨の信仰は

問題でない、墓地は個人の所有だというのです。ここに問題が起って来るのです。

法律の上では色々と解釈されていて、まだきまってはおりませんが、目下裁判中のものが三四ありまして、これがどう判決されるかで今後の方針がきまるでしょう。

それよりも大切なことは、おっしゃるとおり、宗教家同士が墓地をはさんでケンカしたり、坦家同士が仲たがいするということです。信仰は自由だと一口にいいますが自由ということと「勝手」ということとはちがいます。自分勝手に坦家でなくなっておいて、死んだ時にお骨の始末がつかぬから埋めさせろというのは、「勝手」も甚だしいものです。法律を楯にとったり、大勢でどなりこんだりして、無理にお骨をおさめたとしても、それで亡った方が安らかに永眠出来るか出来ないか、いうまでもないことと思います。信仰というものは理窟や法律できめられるものではありません。そこのところを考えてみれば仏様を中にはさんでケンカなど出来るわけがないのです。

学会の人が信仰をすすめに来ると、すぐに、「信仰の自由」ということをいいます。信仰は自由なのだから、今までの信仰をやめて、日蓮正宗の信仰に変りなさいといいます。ところが、これは言葉のあやでして、決して信仰の自由ではないのです。日蓮正宗の信仰を押しつけているのですから、これは信仰の強請です。仮りにいままでの信仰が間違っていたにしても、それを信ずることも自由ですし、その信仰をやめることも自由です。だからといって、日蓮正宗にならなければならぬわけはありません。「信仰の自由」ということはひっくりかえせば「信じないことの自由」ということなのです。ですから、あなたが、学会の人にいくらすすめられても、この「信じないことの自由」を主張すればよいのです。

ここのところの理窟がお分りになれば、念仏と題目と、どちらがいいかなどということは、自然にわかることです。

念仏にせよ、題目にせよ、心からこうと信じて唱えるのでなければなりません。ひとにすすめられたからとか、病気がなおるかも知れぬからといった、半信半疑であったり、御利益目当てのものであってはなりません。ですからまた、念仏をやってみたり、題目をやってみたりといった、両天秤でもダメです。ここが「信仰の自由」のメドです。ズバリと題目をすてて、口なれた「念仏一本」に進むことです。念仏の教えが弘まって八百余年。その間、念仏によって助けられた人の数は無数であります。そのことをよく心にとめて、疑わずに直進・直信することが大切です。

念仏や題目をいくらとなえても病気には何等直接の影響はありません。題目で病気がなおるなら、創価学会の戸田会長が五十六才で若死するはずはないといえましょう。信仰はあくまでも心の問題です。そして、心を平静にすることが、病気回復に役立つという意味が、信仰は病気にききめがあるわけで、それはあくまでも間接的です。ここのところを間ちがえないようにして、御老人の御気病を御看護下さい。

（仏教習俗覚書　3）

鞍馬の竹切り

——竜蛇信仰と仏教——

中　村　康　隆

竹きりや杉の嵐のはしる音（麻父）
竹きりや近江丹波の荒こぶし（弄鵜）

牛若丸伝説で有名な洛北鞍馬寺は、毘沙門天尊崇で信徒を集めているが、六月二十日にこの寺の蓮華会の一こまとして行われる「竹切り」の行事は、古くから俳句の季題にもなり、近年殊に民俗学者の注目を集めたほどの興味深い民俗的儀式といえよう。

この儀式や十月廿二日の「鞍馬の火祭り」などには、村人たちが昔ながらの法師姿で奉仕する習わしがある。

鞍馬村は江戸時代には三百軒、幕末百五十軒、昭和十一年頃百廿軒位の戸数だったという。全村十町、大別して山門から上を上在地、山門辺りを中在地、下手を下在地と呼ぶが、総別して村人は七つの仲間（組）に分かたれる。すなわち、大僧・宿直・名衆（一名神主）・僧達・大夫・大工衆・脇の七仲間で、分家筋や外来者などを含む脇仲間以外はいわゆる鞍馬法師の子孫の家柄であり、大僧は特に法師とも呼んで僧籍をもち、長徳・覚伝・蔵味・福安・覚蔵・蔵福・道覚・元徳・浄安・正斉などの山法師名を継承している。宿直仲間は牛若丸に剣法を伝授した武士の子孫だといわれ、この鞍馬寺を管轄した粟田青蓮院の宮の青侍

として宿直十名を召されることがあったので髪を剃らなかったものだという。大僧・宿直・名衆を三仲間といって、旧幕時代にはその中から各一名づつ選ばれた三名を大年寄として一年任期で鞍馬寺と村中の事務をつかさどったという。

大僧仲間の年寄に唱講（称講。四名。年長者終身制）、講師（六名）、法師（人数不定）があり、大僧の上席廿人を廿人年寄とした時代もあって、十七才で火祭りにチョッペンといって神与の鼻屏を勤めると大僧の仲間に入り、廿人年寄までの間を中老と呼んだこともある。位階の昇進には振舞が必要で、仲間入りを「こと入り」とし、「中老成り」「老僧成り」「称講成り」「三和尚成り」と進み、唱講の首席を一和尚と呼んだ。戦時中には上中各二軒、下在地五軒、合せて九軒の大僧（?）仲間だったというが、近頃まで大僧は二十軒だったそうで、近江丹波の二座に分かたれ近江の竹は近江座、丹波の竹は丹波座が切ったというが、今は人数が減っているので適宜に分かれて竹を切るのだそうである。

鞍馬寺はもと天台宗で、いまは鞍馬弘教総本山と称しているが、古くは九院十坊とっいて、山門から上に九寺院、門前に十坊があったが、いまは本堂と一坊があるだけという。この外に今は洛中に移転したが昔は門前に真宗の寺があった。恐らく鞍馬法師たちは祭事にたづさわり不浄を忌んだので、葬祭にあづかる寺が必要だったのであろう。

竹切りの行事は、大僧が勤め僧達も補佐する。僧達を寺役人とも云い、組頭が十徳姿で法螺貝をたづさえて出場し準備の時間等を合図する。奉仕者は前から別火潔斎する。

六月十六日に本堂裏横手の閼伽井護法善神社に社参、十八日に竹吊りをする。竹吊りは寺で用意して吊る。雄竹四本雌竹四本で、雄竹は周囲尺二三寸の大竹で根を切り葉をつけてあり、雌竹は大分細い根と葉のついた竹である。本堂正面の左右の廊下に丸太を建てて左右四本づつ、上より雄雌雄雌の順に横に吊る。本堂に向って右が近江座、左が丹波座となる。大僧仲間は五日の日に定めたその年の当番の宿に正午頃集まって、素絹を着て武者草鞋をはき法師頭巾をつけ（元来頭を剃ったのを近来改めた）、腰に南天の小枝をさし大小を帯び、袋に納めた山刀を肩にして十徳姿の唱講に導かれて二時頃山門から登って本堂下の茶所に至り、寺の本坊で蓮華会を行なうべく出を待つ貫主と衆僧らと共に、僧達の組頭の吹く法螺を合図に本堂に登る。本堂の前で大総は北、衆僧は南に一列に並んで挨拶をして、衆僧は本堂に上り、大総は堂前左右に近江座丹波座の貼紙の下に分かれて向い合う。切り手四人と竹のまわし役四人併

せて八人の若者達である。幅広の山刀も四口はならし切りに、四口は勝負に用いる。堂内では貫主を中心に十数人の衆僧が内陣を背に半円形に立ち並ぶ。すると「宮地」（「祈られ坊」ともいわれ、神の憑座とされ、江戸時代は一名で僧形）という二名の稚児（男児）が二名現われ、貫主前で「唯今ならしを切ります」といい、次に近江座の前まで段を降りて行って近江の竹は見事でございといい、同じようにして丹波座にも告げる。これを七度半の使と称する。

それから雄竹をおろして堂前に横たえ長さ一丈ほど十節だけ残して本末を切りすてるのを「ならし竹」とか「ならし切り」とかいう。こうして四本を並べ、宮地の使によって始められる本堂内の蓮華会法要（散華行道）を見守る中に導師は秘法を修し了って表に向いて桧扇を静かに三度あげる。一和尚が三度目の瞬間ホウーというを合図に竹が二節づつ五段に切られる。廻し役（白頭巾を額の所で紫の布紐で結えている）が腰をかがめて両手で差し出す竹を切り手（赤い布紐の額当てをしている）は左肩で受けて左手で抑え右手に山刀を揮って一刀二刀と切る。廻し役は切るに従って竹を廻しながらつき出してゆき早く切り終ると見たらすかさず例えば近江の勝ちいと叫ぶ。切り手は最後の一片を左脇に抱え山刀をふりかざして堂前の石段をかけおりて本坊に達する。人々は近江が勝てば米価が下り丹波が勝てば上るといって一年の豊凶を占ったものだという。

この晩真夜中に蛇捨て式が行われる。これは僧達の役目で、切断された竹を持って人夫に大松明に火を点じたのを持たせ、谷向うの蛇捨山（大虫峯、大虫峠、竜ケ嶽ともいう）に駈け登り山頂の平地を三度廻って焼き捨て来た（その際貫主らももとは出向いて蛇捨ての秘法を修した）というが、今では魔除けになるというので竹は更に小さく切って講中に渡すので、蛇捨て式は順は逆だが前の晩十九日の十二時頃本堂で唯一人貫主が秘法を修すると同時刻に蛇捨山頂に松明だけを捨ててくるそうである。雌竹の方はまたもとの籔に植え直すが本来だが今は捨てて了うらしい。

鞍馬の竹切りとして著名なこの儀式は、つまりは雌雄の蛇になぞらえている訳である。寺伝によると中興の祖峯延和尚（東寺十禅師の一人）が護摩を修している時北の峯から大蛇が現われ呑もうとしたので、大威徳並びに毘沙門天呪を誦して調伏したとの故事になぞらえたものだとのことであって、この説は古く扶桑略記延暦十五年の条にも出ている。

ここには大蛇とのみあって雌雄二匹とはないが、一説に

は往古鑑真僧正がこの山に入り雌雄の大蛇の人を悩ますのを念力で雄を滅ぼし雌にこの山は水に乏しいから水を与えよと諭し、これによって清き泉を得て、雌蛇を閼伽井護法善神として祀るに至ったともいう。この伝説は峯延和尚にも結びつけられたりしており、何れも竹切り行事の説明から出ているようであり、この行事はもともと鞍馬辺の村人の古い民俗的儀礼をとり入れた習合形式と考えられる。

近年肥後和男博士はこれを山の神信仰と結びつけ八岐大蛇の故事と関係づけて説明しておられる。すなわち、氏は近在の鞍馬谷を入った愛宕郡北背村別所の曹洞宗福田寺の境内にある毘沙門堂の正月十五日の真夜中に行われるオンベエウチの行事も、もとは藁で蛇体を作り十三仏の名を記した札をつけて堂の内側に吊り首を窓から出し、行事後村の南端の勧請かけの木に道を挟んでかけたというから、栗の木の棒二本(お粥まい水及び粥杖)で護摩中毘沙門呪(オンベエシラマンダヤソワカ)を唱えながら堂の板間を叩いて杖を割り裂いて了い、後神酒をくみ終って住職から牛王の札を受けて粥杖にはさんで皈るというものも実は蛇をうつ形式の名残りと考えられると解し、近江にも正月に藁の蛇体を作って山の神を祭る風習の広く行われておる点にも注目されている。大津市の北の滋賀村の大字南滋賀字正光寺の部落でも、七日に子供たちが藁を集めて正興寺へ持ってゆき、寺の本堂で青年が長さ数十尺の蛇を柱に頭をしばって胴から尾ととぐろをまかせつつ作り終ると、尾端を持って一散に表へ駈け出そうとすると、仲間中の年長者は頭の方へ年少者は尾の方へすがりついて綱引きをし結局尾の方が負けて蛇を本堂内にひきこみ天井に吊して法要をし、蛇体の頭から頸にかけて十二本の小さい幣束を青竹にはさんでさし、農具の物作りを藤蔓で結びつけ、青竹の筒に酒を入れたもの、長さ太さ共一尺五六寸の男根様の杉丸太の作り物を縛りつけ、裃をきた者(堂の神主)がにない僧及び組の役員らと山の神の森に送りその神木に頭をあきの方に向けてぐるぐる巻きつけ読経をして貰うという。甲賀郡雲井村大字牧字漆原では、正月四日字中の若者らが藁を持って集まり、四間ほどの蛇体を作り、山の神とされる杉の大木に頭を恵方に向けて巻きつけ、年行事が心経を誦すると一同して声をあげて櫨の木の矢を投げつけるという。

こうした例からして博士は八岐大蛇神話もむしろ民間儀礼の蛇斬り行事の説明として発生したもので、山の神としてのスサノオノ尊と洪水の具象化として大蛇斬殺と女性に比しての稲田の豊稔祈願とを示すものだと解し、鞍馬の竹切りも実はこうした古い民俗行事の転化だと見ていられ

る。たしかに博士の解釈はこの行事の核心をついていると思われる。

古風土記などを見ても、蛇は夜刀神即ち谷の神と崇められているし、書記の闇龗・高龗とあるのも暗い谷あいや山岡にいる蛇神の意味で、延喜式神名帳に見える諸国のオカミ（意賀美、於加美）神社とか、ミツチ（蛟螭、味知）神社や野蛟神社も蛇神を祀る社とされる。オロチ、ミヅチ、ノツチはそれぞれ峯や水や野の精霊を意味する古語だから、素神説話のように山の神や稲作と結びつくのも当然といえよう。

京洛一帯にも近江の山の神祭りのように藁蛇を吊ったり射たりするところも多いが、乙訓郡乙訓村井内の小字射場は森になっていたが、矢謝講といって正月（後に二月）九日に十五才の青年がそこで東面し藁で作った大蛇を射て元服をするが、年々乙女をとりに来た蛇を射ると伝えており、同村今里でも二月十二日もとは浄土宗普明寺で、廃寺後は真言宗乙訓寺で講の祭りをし、藁の大蛇を座入りの青年が射たが、人身御供の遺意で乙女の形にした餅を大蛇に供えたということである。

かようにして、鞍馬の竹切りはそれが生まるべき当然の民俗的背景を今日までその周辺に残していたのであった。

なお藁蛇の代りに竹が用いられたのは、筍を竜孫・竜鱗・竜角などと呼び竹を竜種・竜鐘などいうところからする文人的着想かともいわれるが、仏寺の行事としては大変興味の多いものである。

お能や舞踊で有名な道成寺伝説にしても、もとはこうした民間の蛇祭り伝説の転化と解してよさそうである。現に洛北大原村の花尻森や乙ケ森の伝説にも、昔若狭から京へ通う大名がお通という大原女を召したが後虐待追放したので激怒したかの女は鬼となって大名行列を追い大原の入口の川で大蛇となって阻んだのを大原の勇士がこれを斬って頭を花尻森に埋め胴を乙ケ森に埋めたとある。その後祟りのため田が実らず悪疫が流行したので節分に社に籠って祈ったので祟りが止んだといい、旧暦二月上旬に蛇祭りをして乙ケ森に蛇形の注連をかけ、また花尻の森でも正月に蛇祭りをして社前に太い注連をはるという。一説には江州朽木の大名が石織の娘おつねを召して追放し家来から女郎が淵に投げこまれた娘が大蛇となって大名を花尻まで追ったのを大原の源大夫という武士が退治し、のち祟りがあったので、守護神として花尻森に源大夫社を祀り、大蛇はおつが森に斎いこめて祭ったとされ、花尻の森は男神、おつが森は女神とも言い伝えている。これらから考えて、いわ

ゆる道成寺伝説も、実は古い蛇祭りについての説明説話の一つといってもよいのではなかろうか。

遠州桜ケ池のお鉢納めの行事も、もとは稲の農作を願う農民の蛇祭りの転化と解することも出来そうである。この地方には九頭竜神社などといった仏教系の竜蛇信仰の名残りが残っているようで、これに皇円阿闍梨伝説が結びついものたと想われるのである。

六月頃催される夏祭りは、当然水神祭の系統が多い。日本の水神信仰には㈠河童を伴った天王㈡竜蛇を伴った弁天の二種類が大別されるというが、前者は川祭り、後者は池、湖、海の祭りに多い。大和薬師寺の竜王会（六月廿六日）、淡路由良八幡の竜王祭（旧六月三日）愛知県知多郡日間賀島の竜宮祭（旧六月十五日）、長崎県南松浦郡中通島の竜宮祭（十月中）、福岡県糟屋郡志賀町志賀海神社の竜神祭（六月十四日廿一日）、箱根神社の竜神祭（七月三十一日）、京都神泉苑の竜王祠祭（五月一日）などと多く、漁村では漁を守護する海神、農村では雨乞いを祈る作神とされる例が多い。竜神とか竜王などというのは明らかに仏教関係を主とする大陸からの影響で、神社にして両部系統と見てよいようである。天王さんの元締めの祇園会（七月十七日神幸祭）で名高い八坂神社にしたところでもともと雨乞いなどした竜蛇の神を祭ったのが本体であって、それに牛頭天王や素盞嗚尊が結びついたものとされている。箱根神社の湖上祭は流灯で名高いがもとは九頭竜明神に強飯を器に盛って献供した竜神祭で全く桜ケ池の神事と同類であった。

水天宮や宇賀神の崇拝も仏教系の竜蛇信仰で、殆に後者は宇賀魂（保食神）と習合したものとされている。この外、仏教寺院の荘厳には竜鳳亀麟や獅子などがとり入れられて仏法守護のものとされ、葬祭にも竜幡が用いられ、お施餓鬼の小旗なども竜幡の略式として田の水口などに挿して、稲作の順調な生育を祈るしるしとされたものである。

茨城の牛久沼の側の牛久町田宮の部落では八月十三日の盆に、一月位前から子どもたちが集めた茅萱で六七間の蛇を作り、薬師堂前にとぐろを巻かせて住職の誦経の後、子どもたちがこれをかついで墓地にいって精霊迎えをし部落をかついで家毎に精霊を渡して廻る風習があるという。ここにも八阪神社が祀られているのは強ちにこの風習と無関係ではないのであろう。とにかくここにも古い竜蛇信仰と仏教の結びつきが見られるようである。

（大正大学講師）

会員だより

拝啓　時下いよいよ御清適の御事大慶に存じ上げます。

毎度、浄土誌を御送附賜り、編集の御苦労を謝しつつ拝読して居ります。特に、四月号御掲載の北川桃雄先生の「西方浄土変と阿弥陀三尊像」は大変興味深く拝読致しました。北川先生はその方面の権威であられるので、一度是非親しく御指導をいただきたく思って居りましたが、今回の先生の御発表を拝読して、私の疑問も解かれましたことを非常に喜んでいます。本誌を通じて厚く御礼申上げます。末筆乍ら先生の御自愛を祈念致します。

（富山県高岡　水上生）

前略、編集に参加している先生方の御苦心いかばかりとお察しいたします。毎号味いつつ、一たび再たび読み返して、すこしでも自己の信仰をふかめるべく努力をいたしております。ただ、ちょっと苦言を呈しますと、私のように、二十年以上も浄土に親しんでいますものは、さほど感じませんし、むしろ、その底に流れる深いおしえを汲みとっておりますが、はじめて浄土を手にされる方、或いは、門外漢の人たちにはすこし程度が高かすぎるのではないでしょうか。もう少し、その辺にお心を配っていただければ幸いに存じます。先生方の一層の御発展をお祈り申しあげます。草々

（高校教諭　丸山生）

毎日若い身を病床に横たえながら、再起の一日も早からんことを念じて、今日も過しているものでございます。昨日、友人より浄土を送っていただきました。専門的な記事は一寸むずかしすぎて、もてあますのもございますが、中でも、わたしの注目を引きましたのは、森赫子さんの身辺雑記でした。拝見しているうちに、この体を通してのぬくもりというか、かよいあいというか、何時までもきえ去ることのないほのぼのとしたものを感じました。これに類したものを、どしどし御掲載いただければ幸いこの上ないことでございます。先生がたの御苦労を謝しつつ、

（療養所にて、小林ふさ子）

「浄土」購読規定

一部　定価　金五十円（送料四円）

会費一カ年　金六〇〇円（送料不要）

浄土　六月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可
昭和三十五年五月廿五日　印刷
昭和三十五年六月一日　発行

定価　五十円

編集人　村瀬秀雄
発行人　佐藤密雄
印刷人　神谷秀雄
印刷所　神谷印刷株式会社

発行所　東京都品川区上大崎一ノ七八二　法然上人鑽仰会　振替東京八二一八七番

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。
◇会費は年額六〇〇円です。
◇会員には毎月浄土を配布します。
◇この会は皆様の会ですからその発展の為にお一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。
お知合の方にゼヒおすすめ下さい。
◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二
法然上人鑽仰会

△新刊のお知らせ▽

大正大学教授　佐藤良智著

真理のはなたば

若き人びとにおくる佛教入門

新書版
定価　七十円

青年会　婦人会に最適のテキスト

△既刊（在庫僅少）▽

大正大学教授　竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円〒八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるこころ
4. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一ノ七八二
法然上人鑽仰会
振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿日　第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和三十五年五月二十五日印刷　昭和三十五年六月一日発行

大正大学教授
文学博士　竹中信常著

宗教儀礼の研究

A5
本文三八〇頁版
定価九百円

宗教は実際に生活の上に、実践されなければならない。著者はそれを儀礼の形で体系化した。そのいわんとするところは、信仰と儀礼の一致相即である。本書は著者が学位請求論文として提出したものをもととして成されたものであり、その内容は次の如くである。宗教宣布信仰実践、法式作法に関心ある方々にひろくおすすめする。

内容
序説　宗教儀礼の意味
第一編　儀礼の理論……儀礼学説、儀礼発生論、儀礼類型論、儀礼における否定と消極、儀礼変容論、呪術と儀礼
第二編　儀礼の様態……祈禱、死の儀礼、物忌と断食、血の儀礼、火の儀礼
結論　礼儀と信仰

特価800円
送料当方負担

竹中信常著

宗教心理の研究

A5
本文五三〇頁版
定価一二〇〇円

本書は、宗教の心理についてその理論と現象とを刻明に敍述したもので、右の新著と併せ読まれるならば宗教信仰の全貌が手にとるように理解されるであろう。

内容の一部　宗教心理学史、直観と霊感、宗派心、聖者性、フロイトとユング……等

特価900円
送料当方負担

発行所　青山書院
東京都品川区上大崎一の七八二

本会御注文の方に限り特価
申込先　法然上人鑽仰会

日本一の生産・設備

梵鐘（54cm～85cm）
喚鐘（21cm～51cm）
在庫豊富

音響理学博士　青木一郎先生
梵鐘界の権威　日展参事　芸術院賞受賞　香取正彦先生

日本最初の黄綬褒賞
（昭和三十年四月廿七日）
鋳物師　老子次右衛門翁

大阪市北区曽根崎町一丁目
大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社　老子製作所　大阪支店
電話大阪（34）8847番　本社工場　高岡市横田